
最強の異常者

戦場ヶ原 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の異常者

【Nコード】

N8384M

【作者名】

戦場ヶ原 戦

【あらすじ】

転生した主人公はめだかボックスの世界でどんな物語を繰り広げるのか…。

処女作なのでよろしくお願いします。
基本的に原作沿いです。

プロローグ（前書き）

今回は主人公と神の会話が主です。

プロローグ

オッス、オラごk…ハイ、調子乗りましたすいません
山田陽一です。早速ですが、わたくし…死にました
頭イタイ人だとか思わないでください！マジです！マジなんです！
それでいま…

創造神と名乗るオッサンが土下座してます…

「どーすりゃいいのよ…」

俺は空を見上げる。

「ああー、空が青いなあー」

あ、ネットで新作の小説しらべなきゃ

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……………」

「うるせえええええええつ！！！！！！」

ドガッ！！↑俺が創造神（笑）の顔面を膝蹴りした音

「グハァッ！」

「さっきからごめんなさいごめんなさいうるせえよっ！！つーか何
で俺死んだんだよ！」

「オオッ！死んでおることを理解しておるのか！ならば話は早い！」

「イヤ、お主の死に方があまりにもかわいそうでのう」

かわいそう？

「どんな死に方だったんだ？」

ここは気になるところだ

「道ばたに落ちていた空き缶に足をすべらせて後頭部を強打してのう、打ち所が悪かったらしくてな、即死じゃ」

なに！？

「し、死因が空き缶だと……………」

嘘だあああつ！

「ぞ、残念ながら事実じゃ（かなり悔しがつておるな、ますます言いにくいわい）」

ん？今一瞬様子がおかしかったな

「そ、そんな事ないぞ」

「本当の原因はなんだ」

「いや、そのう（一・一；）」

「ん？なんなんだ？」

「じ、実は、わしのくしゃみのせいでお主の寿命を間違えてゼロに
してしまったのじゃ」

は？（。□。）

「え？なに？アンタのくしゃみひとつのせいで俺死んだの？」

「うむ、その通りじゃ」

はぁ！？Σ（。□。）

「ふざけんじゃねえ！このクソジジイイイイイ！！！」

「お、落ち着くのじゃ！」

これが落ち着いていられるか！ゴラァ！

「お詫びにチートな能力付けて好きな世界に行かせてやろう（コレ
で落ち着くか？）

なっ…！？

「今までのご無礼お許しください神様」

「うむ、分かればよい（すごい豹変ぶりじゃのう）それでは生きた
い世界は何処じゃ？」

ムフフ、こりゃもうめだかボックスしかないっしょ！

「フムフム、めだかボックスか、よかろう」

ヨッシャアア！

「さっさと能力を決めてしまってくれ」

んゝ、能力かぁゝ、別にめだかボックスだとなぁ
ファンタジーじみた能力はいらないからなぁ

「じゃあ、まずは身体能力を高千穂の10倍にして知能を名瀬の10倍にしてくれ」

それから俺だけの異常くれ」

「フム、それではその能力と異常の名を言え」

「異常の名前は全知全能オールパーフェクトで能力は出来ないことはない」

「それってかなりチートじゃないかのう」

いいじゃん！どうせだから思いっきりチートにしたいんだよ！

「あと、俺が全力出しても壊れないような高性能なノートパソコン
頂戴」

どうせならなんか色々開発とかしたいじゃん

「フム、その気持ちは分からんでもないがのう。それで最後かの？」

「あとはそうだなゝ、あ、そうだ！幻想殺し頂戴！」

「よかろう、右手だけでいいかの？」

「いや、全身だ」

「と言うと？」

「俺に触っている、もしくは俺に触られている奴の異常を無効化する」

クックック、これで十三組の十三人の異常を無効化出来るぜ

「腹黒いのう、お主」

うるせえ

「では、お主は箱庭学園の生徒で、住む所は箱庭学園から近いところにしておくからの」

「おう、サンキュー」

あ、そういえば

「名前って変えられるのか？」

「もちろんじゃ」

じゃあ

「俺の名前を氷剣刀哉ひょうけんとうやに変えるぜ！」

「……………」

や、やめろ！俺を哀れみの目で見るなあ！

「ハア…、まあいい、それでは送るぞ。じゃあの」

俺の下が地面が無くなった

「おい！ちよつとまってえええ！！」

「箱庭学園の入学式の2日前じゃからの」

「このクソジジイイイイイ！次会ったらぜってーボコるからなあ
ああああああ………」

そして俺は意識を失った

プロローグ（後書き）

ありがとうございました。

訓練（前書き）

第二話です。よろしくお願いします。

訓練

「う、ううん…。はっ!？」

目が覚めると俺はベッドで寝ていた

「ここは…俺ん家か…、今何時だ…」

俺は時計を見る

「まだ6時か…、取りあえず家ん中を散策するか」

30分後

「この家って俺一人で住むには広くないか? まあいいや」

とにかく、地下にあった訓練室でちゃんと異常使えるかどうかため
してみるか

移動中

「さてと、まずは…超電磁砲!」

バチチチチ……チュイイイイン……ズガアアアアアン!

「…………これは危険だな。異常者以外には撃たないようにしよう
次、瞬間移動!」

シュンッ

「コレもOKと…次…」

二時間後…

こんなもんか…」

俺の前には、もはや原形を止めていない人型の的が……
ちよつと派手にやりすぎたな……

「まあいいか、疲れたし寝よ」

俺はベッドに入ったらすぐに寝てしまった…

訓練（後書き）

ありがとうございました。

外伝：能力確認（前書き）

よろしくお願いします

外伝：能力確認

さて、今回は俺の能力確認をしたいと思います

まずは、前世からいちばん使いたかった万華鏡写輪眼（初期の写輪眼も使える）

俺の万華鏡写輪眼は原作に出てきた能力は全て使える

しかも視力は下がらないというチート

そして白眼、輪廻眼もつかえる（輪廻眼は使いどころがあまりないので滅多に使わない）

さらに三代目風影の血継限界だ

砂鉄は常に腰のケースに入れて持ち歩いてある

さらには迅遁・鋼遁（詳しくはWikiで）

しかし、この世界にはチャクラが無いのだが「気」つまり、精神エネルギーがチャクラの代わりとなる

他の魔力や能力を使う上での燃料に当たるものがこれだ

次は「とある科学の超電磁砲」の能力全般

一方通行（アクセラレータ）オフエンスアーマーまで使えたぞ

ちなみに窒素装甲と一方通行の二重装甲を常に（戦闘時は）展開している

正確に言うオフエンスアーマーと窒素装甲を展開し、その下に一方通行の反射（ベクトルの反転）を展開している

つまり、強力な窒素装甲を破ったとしても、その先には更に強力な

一方通行の反射（ベクトルの反転）アクセラレータが待っているというわけだ
そして幻想殺しイマジンブレイカー

次はめだかボックスアブノーマル マイナスの異常と過負荷だ

高千穂の反射神経は勿論のこと

日之影の知られざる英雄まで使えた（学園で実証済み）
ミスターアンノウン
オールフイクション

勿論球磨川の大？憑きも
シ・エンド

めだかの完成は使えなかった
オールパーフェクト
シ・エンド

恐らく、俺の全知全能が完成と似ているからだと思われる
アブノーマル
オールパーフェクト
マイナス

そして俺オリジナルの異常の全知全能と過負荷の永遠の痛み
エターナルペイン

今のところこの先活躍しそうな能力はこれです

今後増えていくかもしれませんが

よろしく願います

外伝：能力確認（後書き）

ありがとうございました

初登校（前書き）

今回はパソコンからの投稿です。
投稿の仕方バラバラですいません

初登校

なんだかんだで、俺は箱庭学園入学式の日を迎えた

「ふああー、寝みー！」

訓練やら何やらであんまり寝てねーんだよなー

移動中

「おお！これが箱庭学園か！原作と同じく広いな」

ちなみに今はまだ早朝なので登校している生徒は少ない

今のうちに決められたクラスに行っちまおう、混むと面倒だし：

おれは一年一組か：まあこの世界に来てからまだ誰にも異常見せてないからなー、当たり前か：ん？おお！あれは主人公の一人の人吉善吉じゃん！さっそくエンカウトとるぜ！

「おーい！」

「ん？何か用か？」

「お前も一年一組か？」

「ああ、《も》ってことはお前もか？」

「おう、おれは氷剣刀哉だ、ヨロシク！えーと……お前は？」

まあ知ってるけどな、原作で（笑）でも初対面のフリをしないとな

「俺は人吉善吉だ。ヨロシクな」

「じゃあさっさと教室に行っちゃおうぜ」

「そうだな」…………

そして放課後

ん？時間飛んだって？学園生活って書くことないんだよ！

それじゃあ帰りますか

ん？あれは……特待生の鍋島先輩だ……

どーしよ……原作キャラとは接点持ちたいからなあ、でもさすがにまだこの時期から鍋島先輩と知り合いになってもまだ早いかなあ……まあ原作キャラと接点持っても損は無いだろ

「どーもどーも！」

「？誰やキミ」

「新人生の氷剣刀哉です。初めまして、《反則王》の鍋島先輩♪」

「っ！？君……何者や？」

「やだなー鍋島先輩、俺はなんの長所も無い普通で普通な《ノーマル通常》ですよ。」

それじゃ、また今度」

（鍋島side）

なんや今の新入生……まるで隙が無かったで、あれで通常ノーマルやて？ありえへんやろ……、どう考えても11組（特別体育科）でトップとれるで、あれは

氷剣刀哉か……

面白い子やな……覚えとこ

）氷剣side（

そういや鍋島先輩、なんか警戒してたな警戒されるようなことしたっけ？

うーん………また今度考えよつと

これで俺は箱庭学園初登校日を終えた

初登校（後書き）

ありがとうございました

生徒会選挙（前書き）

お気に入り登録してくれている方々、ありがとうございます

生徒会選挙

さて今週から生徒会選挙だ ん？また時間飛んだって？

だって学園生活って毎日毎日同じようなことばっかなんだよ

あ、途中から不知火入ってきたけどな

お！あれは！

「おーい、人吉！何やってんだ？」

「見りゃわかんだろ、選挙活動だ」

いや、見りゃわかるけどさ…

「じゃあお前、生徒会選挙出るんだ」

「ちげーよ、あいつの手伝いだ」

「あいつ？ああ、あの完璧超人か

でもあのお嬢様と人吉ってどんな関係なんだ？」

「ただの幼馴染だ」

「へえ、まあ頑張れよ。じゃあまた後で」

「おう、じゃあな」

そしてホームルーム前

……おいおい、いくらなんでも遅くねーか？もうすぐ先生来るぞ

ガラッ！

「氷剣！俺まさか遅刻か！？」

「いや、ギリギリセーフだ「キンコンカンコン」ほらな？」

「た、助かったぁ」

「にしても遅かったな
なんかあったのか？」

「あのお嬢様の無茶ぶりに最後まで付き合ってたらこうなった」

「あー、それ以上言うな
なんとなく想像つくから」

大変だったんだろうなー

そして選挙結果発表当日

ん？またかなり時間飛んだって？だから学園生活って書くことない
んだって

「それでは、生徒会選挙を発表します。生徒会長に当選したのは…
……

………支持率98%で1年13組の黒神めだかさんです」

まあそりゃそーだろー、だって

「貴様達の悩み事は私の所有物だ。ひとつ残らず私に貢げ！」だぜ？

クックック、今思い出してもおもしろー
っーことは明日は全校集会での演説か…、楽しみだなー

こうして生徒会選挙は終りを告げた

生徒会選挙（後書き）

ありがとうございました

原作介入直前（前書き）

連続投稿です

原作介入直前

前回とうとう黒神めだかが生徒会長に当選して

今は原作でいちばん最初の全校生徒を前にした演説のシーンだ

「世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？安心しろ、それでも……生きることは劇的だ！」

こんなこと言えるってすげーな
俺じゃ到底いえねーや

「そんなわけで本日よりこの私が、貴様達の生徒会長だ！」

学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい。

24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける。」

この啖呵^{アブノーマル}って黒神めだだからこそ切れることだよなー。

こんなこと異常の奴ら含めても言える奴なんてそうそういねーよ

数分後

「ねえ聞いた？新しい生徒会長の噂」

「私達と同じ入学したての一年生のくせに、冗談みたいに態度エルな奴なんだって」

「引くほど美人なんだけど、やることなすこと無茶苦茶に型破りでさ、先生もビビって手エ出せないそうだぜ」

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ

人前に立つのに慣れてるっつーかさー」

「カッ！ありゃあ人の前に慣れてんじゃねーよ、人の上に立つのに慣れてんだ！」

「まあ、そーでなきゃ一年生で生徒会長なんかになれねーよ」

「そりゃそーだよねー♪しかも支持率98%！ぶっちぎりのナンバーワンだもんねー」

「ま、そういう俺らも、あのお嬢様に清き一票を捧げたわけだが…
…人吉はどーすんだ？」

「何がだ？」

「だってお前、選挙活動とか手伝ってたし、やっぱり生徒会入るのか？」

「カッ！なわけねーだろ！これ以上あいつに振り回されてたまるかっての！」

「ふーん、じゃあ生徒会に入る気はないんだ」

「ああ、俺は絶対！生徒会には入らない！！」

……いつ見ても息ピッタリだな、この二人…

「まあ、そうつれないものを言うものではないぞ善吉よ」

ガッシィィ

「!？」 氷「あ」

「ギャアアアアア……」

「あーあ、連れてかれちゃった」

「あれ？ 人吉の奴どこ行った？」

「ん？ 人吉なら今新しい生徒会長に連れてかれたぞ」

「ふーん、そーいや人吉と例の生徒会長てどんな関係なんだ？」

「本人曰くただの幼馴染らしい」

「ま、アタシに言わせりゃ、腐れ縁だけどね♪」

生徒会室

「……まったく、普通に連れてくるってことができねーのかよ。生徒会長さん」

「ふん、私の誘いをすげなくし続ける貴様が悪い。それに、よそよそしい呼び方をするものではないぞ。昔のように、めだかちゃんと呼ぶがよい!」

クックック、さあ！ 原作介入の始まりだ！

原作介入開始

さて、原作介入しようと思ったのは良いがどういった形で介入しているのか：

1・最初っから生徒会執行部側について協力していく

2・あえてフラスコ計画側について生徒会執行部と敵対する

3・敵か味方かわからない謎の人物的な立ち位置になる
のどれかだが…………

まず2は却下、黒神めだかの完成^{ジ・エンド}なんて相手にしたくねーしあれ？　そういえば完成^{ジ・エンド}に全知全能コピー^{オールパーフェクト}させたらどーなるんだろーん……………想像がつかん。まあ、これは置いという

となると、1か3のどっちかなんだよなあ

よし、3だ！

なぜかって？　決まってるだろ！

立ち位置的にかっこいいじゃん！

つまり3だと生徒会執行部にもフラスコ計画側にも肩入れし過ぎないようにしないとな

気イつけよ

お、あれはめだかと人吉じゃん。あの方角は剣道場だから……………
今は第一話の真ん中あたりか
見に行こつと

めだかと人吉を尾行中

ガラッ

「あ？　誰だアお前ら」

「1年13組生徒会執行部会長職黒神めだかだ
目安箱への投書に基づき、生徒会を執行する！」

「あー聞いてんぜ！今をときめくイカれた新会長って奴だろ？
こんなところにお出でになるとは驚きだな！

支持率98%だか何だかしらねーが、生憎俺らは残り2%の方だ
ぜー！！」

おいおい、アンタらもめだかの噂は聞いているだろうに
なんでビビらねーんだ

すげーのか世間知らずなのかどっちだ？（今は物陰に隠れて傍観中）

「貴様がリーダーの門司3年生だな？

剣道か、懐かしいぞ。私も昔少しだけかじったよ。

この木刀もよく手入れされておる。黒檀とは随分と張り込んだも
のだ」

「！？（え…あれ？いつの間に取られた！？感覚どころか気配もし
なかったぞ！？）」

無刀取りって……かじった程度じゃできねーよ
もはや奥義だそれは

「かっ囲め、おめーらー！！」

「おっおうっ！！」

めだか相手じゃ囲んだって意味ねーよ

「……制服改造に染髪、装飾……
校則違反のオンパレードだな
まあ、私もあまり人のことは言えんが」

確かにつてかめだかが着てるあの制服って制服改造で校則違反じゃ
ねーの？

あ、分身の術もどきだ

「なっ何イイイイ!？」

っーか残像が見えるってどんだけ早いんだよ（残像は生身の人間が
出すことは不可能です）

「それでもタバコだけは控えておけ。貴様達の健全な成長を阻害す
るし

何より将来の楽しみがなくなるぞ!」

「え…オレのタバコ!？」

「な…何だ今の!？」

「忍法か!？」

……うん、「忍法か」といった君、君の眼は正常だ
あれは一般人の目には忍法にしか見えん
ん？俺？俺は見えたぞ。しかもバッチリ
あの程度なら俺でもできる

「しかしまあ、荒れ放題だな
よくもここまで学園施設を荒廃させはものだ

逆に感心したくなる」

生徒会長が感心してどーするよ

「なっなんだよセツキョーかよ！」

「お呼びじゃねーんだよ会長さんよお！」

「いい気になってんじゃねーぞコラァ！！」

「哀れなことだ」

「！？」

「貴様達もかつては真っ直ぐな剣道少年だったに決まっている
何か重大な理由があって挫折を経験し道を踏み外してしまったと
しか考えられん」

うわーお、相変わらずとてつもない勘違いぶりだな、おい
普通はそんな考え方できねーよ
さすが《上から目線性善説》

「親に見捨てられたか？

良き師に出会えなかったか？

友に裏切られたか？」

いつも思うけどなんでいちいちポーズとるんだ？

「安心しろ、私が貴様達を更生させてやる！

剣の事以外何も考えられないようにしてやる」

それって不味くね？精神科連れて行かれるぞ

「矯正してやる、強制してやる
改善してやる、改造してやる」

いや、強制と改造は絶対ダメだろ
めだかつて時々危ない発言するよな

「二度とだらけようなどと考えぬよう泣いたり笑ったりできなくしてやる」

いやだから精神科連れて行かれるっての

「まずは素振り1000回からだ！
貴様達、今日は歩いて帰れると思うなよ！！」

「ギャアアアアア………」

不良達のご冥福をお祈り致します

数時間後

「も、もうだめだ」

「体がピクリとも動かねー」

「し、死ぬ」

ずっと見てたけどさー、あれはきついなんてもんじゃねーよ

よく生きてたなアイツら

「それで、いつまで隠れているつもりだ？氷剣同級生」

お！やっと思番か！

「！？ひ、氷剣！？」

「…………いつから気付いてました…………？」

「善吉と共にここに向かっているときから誰かに尾行されている気配はしていた

まあ、半信半疑だったがな」

「へえ、じゃあ確信したのは？」

「確信したのは門司3年生達のタバコを取った時だ
その時に貴様の姿が窓に映っていたからな」

すげー

「さすが生徒会長、お見事です

じゃあ用も済んだし帰らせていただきますよ」

「さて、貴様の用とはなんだ？」

んー、なんて答えようかなー

ここはかつこよく……

「今後、計画に支障が出ないかどうか確かめるためですかね

それじゃあまた」

「あ！おい！」

後ろでなんか言ってるけど聞こえないフリ

こうして原作介入1日目は終わった

剣道部 前編（前書き）

主人公が本格的に活躍するのは鍋島先輩からの投書の時期です

剣道部 前編

翌日、俺は屋上で一人、弁当を食べていた

「はあ、今のこの時代に弁当を一人で食べるって、自分で言うのもなんだけどむなしいな」

屋上には俺一人しかない

まあ、ほとんどの奴は食堂で飯食うからなー、当たり前か

「じゃあ、あれを始めますか」

《あれ》とはフラスコ計画についての調査だ

創造神にもらった超高性能ノートパソコンと俺のハッキング技術があれば問題ない

ん？ いつハッキング技術を身につけたかって？

暇なときにNASAにハッキングしかけてうまくいったからは世界中のヤバイ機関や組織にハッキングしまくってたからなー

お陰で流出したら核戦争が起こりかねないような情報が入っている

まあ、流出なんて絶対にしないけどな

とにかくそれでハッキング技術がついた

カタカタカタカタ

「ふーん…、まだ黒神めだかはまだそんなに重要視されていないんだ

カタカタカタ………

数十分後

ふー、だいぶまとまったな。これは学園長へ脅しをかけるときに便利だな」

もうすぐチャイムが鳴るな……

そろそろ教室に帰るか……

そして放課後

現在気配を完全に消して人吉を尾行中

ふっふっふ、これならばめだかでも気付けない

「まったく不知火の奴、「お嬢様のこと案外わかってないよね」♪」
だとお!?

俺は2歳の頃からずっとあいつのそばにいるんだ!

あいつのことは俺が一番わかってるんだよ!」

まあ小6の頃まで一緒に風呂入ってたほどだからなあ
そう思うのも当たり前か

そして剣道場

「カッ、何だかしらねーけど無性にイライラするぜ!」

それはどうしようもねーだろ

「な、何イイイイイ!? どうなってんだこりゃ

昨日まで廃墟同然だった筈なのに…」

おおー、すげーなおい

いくらなんでも綺麗にし過ぎだろ

これ新築ですって言っても疑われねーぞ

どうやらこうなるんだ

ぜひ教えてもらいたい（地味に綺麗好き）

「遅いぞ善吉、稽古開始時間はとうに過ぎておる
遅れた分帰りが倍に遅くなると心得よ！」

うーん、掃除婦姿あんまりしっくりこねーな
まあいいか

「しかし連中も遅いな
最近は時間にルーズな者ばかりだ」

「遅いも何も来るわけねーだろうが！
道場掃除すりゃ連中が心開くとも思ったのか！？」

それが来るんだなー
考えが甘いぞ人吉くん

「大体お前、なんでここまでしてんだよ
あんな連中お前にとっちゃ見知らぬ他人だろ？」

「愚問だな、わたしは見知らぬ他人の役に立つため生まれてきた」

うわーお、究極の利他主義だな
そーういやめだかがそう考えるようになったのは人吉がきっかけだよな

「順位も記録も下らん

誰かの役に立った時だけ私の心は安らぐのだ!」

「…………羨ましいねどうにも!

俺もお前ほど才能があったら、そんな風に生きたかもな!」

「才能か……、それも下らん言葉だ「下らなくねーよ!みんなそれがねーからガッついて生きてんだよ!」!」

確かに俺も死ぬ前は才能ねーから才能あるやつに食らいつこうと必死だったなー

お!三年生達が来たか

それじゃ、俺はしばらく退散しますか

＼人吉side＼

なんだよ……これじゃまるで……俺が悪いみたいじゃねーか

(私には貴様が必要だから、傍にいてほしいだけなのだ)

馬鹿げてる……あいつに俺が必要だったことなんてあるもんかあいつは気付けば人の上に立ってるような奴だった

その圧倒的なパラメーターゆえ

妬まれながらもやっかまれながらも清濁併せ飲むその生き様に誰もがあいつを好きにならずにはいられなかった

「分かってんだよ、確かに悪いのは俺なんだ……」

ドガッ!

俺は後ろから誰かに殴られ意識を失った

「雑草育ててどうすんだよ、アホが!!」

剣道部 後編（前書き）

八話目です

時間飛び飛びですみません

剣道部 後編

剣道場

ドガッ バギッ グシヤッ

只今日向君が剣道部相手に制裁という名の暴力を下しています
でもこれなら全国レベルだって言う不知火の情報も頷けるな

「ったくよく、高校ではいい子ちゃんを通じたかったんだけどナ」

「だ……誰だお前……？」

「僕？僕は真面目な一年生ですよ」

真面目なら暴力事件おこさねーけどな

「真面目に剣道がしたい、真面目で真面目な男です
だけど聞いてくださいよ！僕団体行動とか上下関係とか苦手です
てね

先輩とか顧問とかと揉めて、いつもボコっちゃうんですよ。そ
れで試合出れねーの」

日向……それはお前が悪い
つか我慢しろよ

「う……それで、剣道部が休部中のこのガッコに来たってわけか」
いや部員一人じゃ試合とか出れねーだろ

「ピンポン！ここでなら一人で好きにできますからね
でも計算外、剣道場には招かれざる先客が！

そこで例のバケモン女こと生徒会長に草むしりをお願いしたんで
すけど

うまく事が運ばねーもんすねー

あ、助けを期待してんなら無駄ですよ

あの女、今頃役員募集演説の真っ最中ですから」

残念ながらここに一人助ける人がいるんだよなー

まあ、俺だけど（笑）

「しかし、ここをキレーにしてくれたのは助かったかな？立つ鳥
跡を濁さずっスね」

うん、確かにキレーだ

「ま………待てよ。勝手なこと吠えてんじゃねえよ！！
たった今思い出したわ

俺は昔剣道少年だったんだよ！！」

それって本当なのかな

どうでもいいか

「俺も……」

「俺もだ……」

「俺なんか日本一の剣士目指してた……気がする」

気がするだけかよ!!

「……うっぜえ!

ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろうとしてんじゃねーよ!

剣道三倍段って知ってつか!? 僕はあんたらの三倍強いって意味だ!!」

出番キター!!

ガシッ!

俺が木刀を掴む

「もうそこら辺にしたらー、日向君?」

「っ!? 邪魔すんじゃないよ!!」

日向が木刀を横なぎに振る

それを俺は右手で防ぐ

そして俺は日向の腹にひざ蹴りをする

さらに日向が怯んだすきに回し蹴りを食らわせふっ飛ばす

「オイよく聞け日向、お前も暴力事件のこしてる時点でドロップアウトしてんだよ」

「っ!? う、うるせえ!!」

お前、剣道三倍段って知ってつか!?

ドガッ

俺が右ストレートを日向に叩き込む

「しらねーよ!!」

「ぐ…が…ああ…」

さて、用も終わったし帰るか
そういえば、人吉来なかったな
まあいいか

「おい、お前…なんで俺らなんかのために…」

うーん…なんでって言われてもなー
原作介入したいからなんて言えないし

「あなた達には固い意志があるからです
剣道をするという意思がね
じゃあさようなら」

我ながらかつこいいこと言ったなー
このあと日向はめだかに更正されるんだったな
日向尾行しよ

このころ人吉は……
原作より日向の不意打ちが強く、まだ気絶していた

「くっそ、氷剣の奴! あんなにつえーなんて聞いてねーぞ
なんで十一組じゃねーんだ!
チームトクタイ
だが、絶対にこのままじゃ済まさねえ! いつかギッタンギッタン

にしてやるぜ!!」

「まあ、そんなに荒れるものではないぞ? 日向同級生」

ああ、日向……どんまい……

「せっ生徒会長!？」

なななんっでっ! 役員募集会はどうしたんだよ!？」

「問題ない。ちゃんと代理を置いてきた」

不知火か……巻き込まれたな

「それで……また覗き見か? 氷剣同級生」

「あちゃ、またばれちゃいましたか」

「ひいっ! ひっ氷剣!？」

「ふむ、その怯え様だとこいつにきついお灸をすえたようだな」

「ええ、あなたの教え子の剣道少年たちを虐めていたので

じゃあ、部活に入っていないのもう帰りますわ

あと日向……まあ……頑張れよ」

「?」

そして俺は帰宅した

「さて、貴様への話の続きだが」

「なっなんだよ！利用された仕返しでもする気かよ！！」

「利用も何も生徒会はご利用いただくためにある

これからも大いに活用してくれてよいぞ

貴様に会いにきたのは単なる別件だ

『「クラスメイトの日向君の性格が悪そうなので治してあげて」
だそうだ」

「しっ不知火ィ！」

「哀れなことだ

貴様もかつては天使のように純朴な少年だったに決まっている

不幸にも愛情に恵まれなかったが故にそんな独善的な性格になっ
てしまったとしか考えられん

安心しろ！二度と悪だくみなどできないようこの私が徹底的に可
愛がってやる！！」

「（氷剣が言ってた頑張れってこのことだったのかアアアア！！）
ギアアアアアア………」

その日男の悲鳴が町中に聞こえたという……

「（日向、ドンマイ！）」

翌日

原作通りに剣道部は日向が指導を務めている

「べっ別に、あの女に言われたからじゃ………」

……ツンデレ乙

そして人吉も生徒会に入ったようだ

あ、そうだ

丁度昨日でフラスコ計画の全貌をまとめ終わったんだよね

新しい情報は常に俺のパソコンに送信されるようになってる

さーて、次に介入するのは……

うーん、しばらくは普通の依頼ばっかだからな

となると……鍋島先輩の次期部長選定のところか

あそこで阿久根高貴が初登場なんだよな

鍋島先輩とは面識あるし

よし！次はそこで介入しよう！

剣道部 後編（後書き）

ありがとうございました

日常（前書き）

しばらく原作介入しないので氷剣刀哉の1日の流れを書いてみました。あまり本編とは関係ないので読まなくても問題ないです。（本当は読んでほしいです）

日常

氷剣刀哉の日常

P M 6 .. 0 0 起床

「ふぁゝ、着替えよう…」

P M 6 .. 1 0 ~ 6 .. 4 0 ジャージに着替えジョギング

P M 6 .. 5 0 ~ 7 .. 2 0 朝食 後片付け

今日は納豆ご飯に味噌汁に白菜の浅漬け

ちなみに白菜の浅漬けは白菜を適当な大きさに切り、しょうゆと味の素と七味を少々と共に袋の中に i n !

後は適当に振れば完成

これがローカロリーで意外と美味しい

P M 7 .. 2 5 ~ 7 .. 3 0 登校

「おはよー」

「おーっす」

「おう」

「おう」

これでもそれなりに人徳はあるので結構あいさつはされる

P M 7 .. 3 0 ~ 8 .. 0 0 クラスメイトとの駄弁り

「それでさー、○○？？が持ってきたゲームが風紀委員に見つかってよ連行されてたんだよ」

「マジで！？よりもよって風紀委員にかよ！
ドンマイだなー」

「知ってる知ってる、風紀委員ってヤバいって噂で有名だろ
それに人数も多いんだろ。そりゃ見つかるだろ」

キンコーンカーンコーン

「ホームルーム始めるぞ
全員席に着け」

P M 8 .. 0 0 ~ A M 1 2 .. 1 0 授業

キング○リムゾン

A M 1 2 .. 1 0 ~ 1 3 .. 0 0

俺は毎日弁当持参なので食堂へは行かない

それにこの時間は俺の l e t ' s ハッキング t i m e だ！

実は稀にだが仕事の依頼でハッキングの依頼が来る

主にお偉いさん直々に

犯罪組織の居場所の解明をしたりハッカーのパソコンに逆にハッキングかけてパソコンのシステムを掌握したり

「~~~~~」

今日の報酬

300万円

何か研究するときの援助

これが何かと役に立つ

実際に色々と開発とかしてるし

例えば、高性能カメラを搭載した昆虫型機械
捜査や調査に便利

挙げていくとキリが無いのでこれだけにしておく

AM13..00~15..50 授業

今日二回目のキング○リムゾン

16..20 下校

「またな〜氷剣」

「ああ、またな」

16..25 帰宅

地味に学園生活疲れる

16..35~19..00 開発中

ん〜、これだと稼働時間が少ないからな〜
新材料でも試してみるか

19..10~19..40 夕食

2	2	1
2	0	9
..	..	..
0	0	5
0	0	0
	)	)
就寝	2	2
	2	0
	..	..
	0	0
	0	0
	く	後片付け
	つろぎ	
	t i	
	m	
	e	

日常（後書き）

ありがとうございました

阿久根高貴（前書き）

十話目です。よろしくお願いします

阿久根高貴

やっと阿久根高貴初登場の日が来たよ

いやー長かった！

さて、柔道部の見学っていう形で行こう！うん、それで行こう！

鍋島先輩とも顔見知りだし大丈夫だよね……一回しか会ってないけど……

じゃあ行こうっと

思い立ったが吉日、それ以外はすべて凶日byトリコ

すいません、パクリました

にしても柔道場でめだかに勝負挑もうかな？

でもなー、ここで勝つと要注意人物としてマークされそうだし……

どうしよ……。そうこうしている内に着いてしまった

俺が入っても気付かずに柔道を続けている

好都合だ、このままめだかと人吉が来るまで誰も気付くなよ……

「ん？おお、氷剣クンやん。久しぶりやね。」

気づかれたアアアアアアアアア！

しかも覚えてたアアアアアアアアア！

なんで覚えてんの！

覚えていると思っていた俺が言うのも何だけどさあ！

「お久しぶりですね

そう言えば、鍋島先輩は柔道部の主将でしたね、というかよく覚えてましたね」

「よく言うわ、まったく隙を見せなかったやん

インパクトあるで？あれは
で？柔道部になんか用か？」

「ええ、柔道界のプリンスと謳われる阿久根先輩を一目見ようとね
…」

そう…、かつて中学時代に破壊臣と言われ、球磨川の指示で黒神め
だかを破壊するも、めだかがあまりにも抵抗せず阿久根の立場が悪
くなり、人吉等に報復されそうになるが、めだかに救われてからは
敬愛するようになる

俺は今回、その破壊臣の実力を見に来たのである

まあ、柔道の実力だけどなく

お？人吉達が来たみたいだ

「じゃあ、ウチは用事があるからまた後でなく」

「分かりました」

さて、見せてもらおうか？破壊臣の実力を

阿久根高貴（後書き）

ありがとうございました

人吉の実力（前書き）

十一話目です。よろしくお願いします

人吉の実力

さて、阿久根先輩の実力を見に来た俺だが…

「ふん！相変わらずめだかさんの足を引っ張ることに精を出しているようだな！

だがいくら虫とはいえ君ももう高校生だ
大きな岩の下に潜んでいたい虫の習性は分かるが、そろそろ独り立ちすべきじゃないのかい？」

「…独り立ちで来てねーのはどっちですか
何もできない？変な変態をめだかちゃんに近づけないくらいのことは出来ますよ？」

………何この空気？

どんだけくどくどぶちぶちいってんだよ

そしてめだかは柔道部員相手に無双中……

やっぱ勝負挑んでみようかな？

ヤバイ………人吉と阿久根の雰囲気さらに悪くなってる

まずい！何か話題を出せ、俺！人吉も阿久根も食いつくような話題を！

「そ、それにしても会長さんすごいですね

柔道部でもないのに全員まとめてでも圧倒してるなんて」

「ああ、流石だなめだかさんは
中学のころよりも輝きを増している！」

「にしても、それに比べたら凡人のクセに天才に付き従つとうジブンのほうがよっぽどスゴイやんなあ？部活荒らしの人吉善吉クン？」

「へえ、最近噂の部活荒らしって人吉だったんだでも鍋島先輩、人吉のことえらく気に入ってるようですね」

「うん！人吉クン見たいながんばり屋さんがうちはめっちゃ好きなよ☆」

「へえ、鍋島先輩って人よしみみたいな人がタイプなんですネそうだ！阿久根先輩、人吉が会長のそばにいるのが気に入らないのなら勝負したらどうですか？」

人吉が勝てば今のまま生徒会にいて、阿久根先輩が勝てば人吉は柔道部の次期主将になり、阿久根先輩は生徒会に入る、というのはどうでしょう？阿久根先輩も人吉に実力があれば文句ないでしょう？どうですか？鍋島先輩」

「うちはそれでかまへんよ」

「僕もそれに賛成だがハンデをあげよう僕が十回取るまでに君が一本でも取れたら君の勝ちでいいよ」

「だそうだ人吉、頑張れよ」

「ええ！？これって拒否権はないのかよ」

「それじゃあ二人とも準備してきてください」

お、めだかが帰ってきた。どうやら終わったみたいだ

柔道部員たちは：ボロボロだな

「会長、お疲れ様です」

「ん？氷剣同級生か
いや、そんなには疲れていない」

まあ、そりゃあそうだろうな
バケモン
天才だし

俺もだけど（笑）
準備ができたみたいだ

「それでは始め！」

ドンッ

は、早いな一本取られるの

「人吉君、君には何もできないというのは訂正しよう。
君のその努力と根性は認めよう
だが、それだけでは僕には勝てない」

その後も原作と同じく人吉は阿久根からは一本も取れず九本目まで
取られてしまった

「（人吉の気力が尽きかけてるな
ということはめだかの応援はそろそろか？）」

「人吉、私は如何なる場合においても決して私は貴様に勝てとは言
わない」

つてもなあ、これって本当に勝てるのか？

「だから勝って！！」

貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ困るぞ泣いちゃうぞ！」

う、うわぁ

これが黒神めだかの真骨頂その二、『ツンデレ』か……

生で見るのは初めてだが、ほんとにいつもとキャラが全然違うな
阿久根と鍋島先輩若干引いてんじゃねえかよ

「お前が泣いてるとこなんて見た事ねえし見たくもねえよ！」

ズドンッ

人吉が大外刈りを決めて一本を取った
やっぱりここのも原作と同じか……

「そろそろ俺は帰らせていただきます」

「あれ？柔道部には入らないんか？」

「はい、今回は生徒会と阿久根先輩の実力を見に來ただけですから」

「へえー、じゃあ勝負しようや」

「は？」

「おーい！阿久根クン！ここにいる氷剣クンが勝負したいそうなん
やけどええか」

「はぁ!？」

「ええ、構いませんけど」

なんで阿久根もOKすんだよ!

「じゃあ、柔道服に着替えてきてな〜♪」

何でこうなったアアア!

「(ふふふ、実力見せてもらうで? 氷剣クン)」

準備終了

「それでは、阿久根高貴対氷剣刀哉の試合を始めます! お互いに、礼!」

「お願いします…」

「お願いします」

「それでは……始め!」

ここはさっき阿久根が使っていた後手必殺でいくか

バツ

阿久根が俺の胸ぐらを掴む

俺は阿久根の腕を掴み一気に背負い投げで決める

ズドン！

「っ！？」

「なっ…！？」

「…！」

まあ、背負い投げつつても、他人から見たらいつの間にか阿久根が投げ飛ばされているとしか見えないだろう

「…審判」

「あ…こ、この試合、氷剣刀哉の勝ち！」

「ふー、じゃあ着替えて帰りますよ」

「え、ちょ、ホンマに柔道部入らへん？」

「言ったでしょう、実力を見に来ただけだって
じゃあ、さよなら」

その後、俺は帰宅した

＼鍋島side＼

何なんや、あの新入生は！？
いくらなんでも出鱈目過ぎるで！？

柔道界で全国レベルの阿久根クンを瞬殺って有り得へんやろ！

＼人吉 side＼

最初俺はアイツを、どこにでもいる普通の通常だノーマルと思っていた
だが、剣道場でその気配にすら気付けなかったり、今阿久根先輩と
勝負し瞬殺した実力を見ては通常だノーマルとは信じられない
アイツはいったい何者なんだ？
それに、アイツが言ってた『計画』って何なんだ？

＼人吉 side out＼

翌日、阿久根は生徒会に入ったようだ
さして、次はどう介入してくかな

人吉の実力（後書き）

ありがとうございました

水中運動会（前書き）

十二話目です

よろしくお願いします

水中運動会

さて、前回からまたかなり時間が飛んでもうすぐ部活動対抗水中運動会の日だ

今回は阿久根を瞬殺したこともあってか助っ人の依頼が半端ないで、いまはこの部活の助っ人するか検討中……………
やっぱ剣道部かな、面識あるし
というわけでさっそく剣道場へ

「すんまそーん」

「ああ？氷剣か
何か用か？」

「ええ、水中運動会の助っ人の件なんですけど
剣道部の助っ人することにしました」

「おお！そりゃあ助かる！」

「それで当日誰が出るのかということなんですけど」

「それならもう決まってる。俺と門司先輩と氷剣だ」

「そうか、分かった。じゃあ当日に」

「ああ」

そして水中運動会当日

「この水中運動会には我々生徒会執行部も参加する！
生徒会よりも総合点が高かった部はその順位に関わらず私が私財
を投じ

無条件で予算を三倍としよう！」

「うわゝ、流石会長。自分の金で予算を三倍にするとか」

「まあ、あいっらしいっちゃらしいけどな」

「ですね」

「お、どうやら第一種目は玉入れみたいです
これはただ玉入れてくだけなんで、チームワークは関係ないです
よね」

「じゃあそれぞれが個人で頑張るということで」

「おう」「ああ」

そして玉入れ競争が始まった

じゃあ、やりますか

俺は水中のお手玉を三十個近く拾い押し固める
そしていったん水底まで沈み一気に水面まで上昇し

「オラァ！」

その勢いのままかごにダンクシュートを決める
これには流石の生徒会も驚いているようだ

「なっ!？」

「あんなのアリかよ!？」

「ッ!？」

「え、えっと……ただいまの水剣選手の入れ方ですが……ルールには何も違反していないので得点に入ります」

その後は地味にかごに投げ入れてた

「それでは玉入れ競争の結果を発表します。
第一位は……ダントツで剣道部です!」

「おいおいウソだろ？」

「あの生徒会がリードされるなんてよ」

「剣道部すごい」

「おい! 水剣!」

「なんですか？」

「なんですか? つじゃねえよ!
何なんだよさっきのは!」

「ああ! あれですか
あれはまず水中でお手玉を拾い、その場で押し固めて、そのあと

水底をけって一気に水中に上がり、その勢いのまま空中まで上がってかごに押し固めたお手玉を Dank したんですよ」

「……お前、本当は十一組チームトクタイだったらしねえよな？」

「やだなあ、門司先輩
俺はただの通常ノーマルですよ」

「はあ…、まあいい
次もこの調子で頼むぜ」

第二種目水中二人三脚

「じゃあ、日向と俺で」

「ああ」

「それでは、よい………どん！」

「あー、めんどくせえなこれ
タイミングとか合わせないといけねえし」

「我慢しろ」

あーめんどくせえ

「やっぱ、こういうのは生徒会と水泳部が有利だな」

「仕方ないだろ」

ん？おお！この方法があったか！

「おい日向！」

「ん？なんだよ」

「後ろに引っ張られる感覚するかもしれないけど我慢しろよ」

「は？」

「オラアアアアアアアアア！」

「ぎゃあああああああああ！」

ズドドドドドドド

説明は簡単。ただ俺が日向を力任せに引っ張ってるだけ
その代わり日向が犠牲となる

日向よ……お前の犠牲はむd「死んでねえよ！」冗談だっ
つていうか地の文に突っ込んでくんない

そうこうしてる内に種子島と屋久島のペアに追いついた

「な、なにに！？」

「なあと予想外の事態が起きました！」

水泳界最速を誇る種子島選手のペアに氷剣選手のペアが追いつ
きました！

不知火さん、これはどういふことなんでしょうか？」

「これは技術とかじゃなくて純粹な身体能力だよ」

「し、身体能力だけで水泳界最速に追いつくことなんてできるんですか？」

「うん、できるよ。でもかなり高くないと追いつけないけどね
それも会長レベルの身体能力でないと」

「で、ですが、氷剣選手も日向選手も一組ノーマルに在籍していますが
これは明らかに十一組チームトクタイでもトップになれますよね？」

「もしかしたら下手な異常よりつよいかもね♪」

「け、結果が出たようです。水中二人三脚は………またしても剣道部の勝利です！」

第三種目 鰐掴み

俺出てないんで飛ばします

最終種目 水中騎馬戦

「じゃあお前が上やってくれ」

「了解です」

「いいか？ ぜってー取られんなよ！」

「分かっていますって」

「それでは……始め！」

「今のところうちがトップなのでしばらくは防御に徹しましょう
他の事に気を取られないで下さいよ」

「おう」「分かった」

「あーあ、みんな生徒会と水泳部の勝負に見入っちゃってるから
鍋島先輩に取られていっちゃってますよ」

「お、おい、もうすぐ制限時間終わるぞ」

「そうですね。」

「じゃあ鍋島先輩が取ってきたハチマキ、全部根こそぎもらいます
か」

「お前……地味に黒いな」

「いいえ、戦略です。」

「あ、向こうから来たようですよ
じゃあ、作戦通りに」

「ああ」

「しくじんなよ」

「ふっふっふ、剣道部……
これでウチらの勝ちや」

鍋島が剣道部の近くまで来る

だが俺はその瞬間

「日向！門司先輩！今です！」

「「おう！」」

俺たちは即座に反転し鍋島の持っているハチマキと鍋島自身のハチマキを掠め取る

「エ？」

鍋島先輩は何が起こったのか分からないようだ

「鍋島先輩、あなたのハチマキはすべてもらいましたよ」

「なっ！？はあ、まんまとアンタらに嵌められたわけか…
負けたで」

そこで競技が終わる

結果は言うまでもなく剣道部の優勝だ

後日、理事長室…

「フム、氷剣君ですか…

彼は通常だノーマルと思っていたのですが

いやはや、認識を改めなければいけませんねえ。

彼は何かしらの異常アブノーマルを持っていると…

そうなんですネ？袖ちゃん」

「ウン、間違いなく何か異常アブノーマルを持ってるよ

あの身体能力はどんなに鍛えてもできるものじゃないからねゝ
もしかすると、都城よりも強力なのかもしれないねゝ♪」

「クリエイト創帝よりも強力ですか……

しかし、今では判断するには難しい。

もうしばらく様子を見ますか……」

氷剣の知らぬところで、計画が進んでいた……

水中運動会（後書き）

ありがとうございました

風紀員会（前書き）

一三話目です

オリキャラ出ます

でもまったく出番ないです

よろしく願います

風紀員会

俺は只今……………

武装した人たちに囲まれています

回想

うーん、次は風紀員会との対立だから……
あ、そうだ！

雲仙冥利と同盟結ばつと
それでめだかフルボッコにでもするか？
まあ、後々考えよう

そして風紀員室

「すみませ〜ん、風紀員長はいますか〜？」

「何か用か？」

「あの一、あなたは？」

「おれは風紀委員の白川だ
で？何か用なのか？」

「風紀員長にお会いしたいんですけど」

「ああ、いまいるが……」

「どうした？」

「実は、こいつが委員長と話がしたいと」

「どーも、一年一組の氷剣刀哉です」

「ふん、ノーマル通常が何の用だ？」

「まあ、立ち話もなんですので
教室に入りませんか？」

「あ、ああ」

「それで？話を聞こうか？」

何でこんなに武装した人がいんだよ……

回想終了

「ええ、あなたは黒神めだかのことを……いや、生徒会執行部のことをよく思っていますね？」

「ああ、奴らは甘すぎんだよ。

話し合いなんかで解決しようとしやがる。
ルールを破ったやつの事情なんか知るか」

「ええ、あなたの言う通りです。
ルールを破った人が悪い。」

罰を受けたくなければルールを破らなければいい。
ですよね？」

「そうだ！

久々だな、ここまで話の分かる奴は。

お前、風紀委員会に入らねえか？」

「武装が許されるのは魅力的ですが遠慮しておきます。

理由は察してください

では、本題に入らせていただきます

簡単なことです。黒神めだかを潰す手伝いをさせてください」

「ほう、だがそれだけの力はあるのか？」

「少なくとも、そこら辺の風紀員に負けるつもりはありませんよ

雲仙委員長？」

ここで殺気を込める

「ッ！？」

……じゃあ、試させてもらうぜ

やれ」

教室内にいた風紀員が一斉に掛かってきた

ドガッバキッ

ふふふ、遅い…遅いぞお！

バコッドスッボゴッ

「終わりましたが、
まだ信用するには足りないですか？」

「なっ！？（いくらなんでも強すぎる！これで通常だど！？）
もう十分だ」

「そうですか
俺としてはもっとやってもよかったですがね
では、何か行動を起こすようでしたら連絡ください
それじゃあ」

そして俺は部屋から出た

＼雲仙side＼

「委員長、彼を襲わせた風紀委員って……」

「ああ、風紀員でも指折りの奴らだ」

それをたったの数十秒で片付けただど！？
それにあの殺気だ

ありやあ人^{バケモノ}が出せるさつきじゃねえ
本物の異常でもねえと出せねえような殺気だ

「クックック、こりゃあヤベえ奴と同盟結んじまったな」
ますます風紀員にほしいぜ

＼雲仙sideout＼

風紀員会（後書き）

ありがとうございました

球磨川禊（前書き）

お気に入り登録してくれた方々
誠にありがとうございます

球磨川禊

今日は鬼瀬針金が出る日だが、俺は体調不良で休みということになっている。

「なっている」というのは、本当は体調不良ではないからだ。

なぜ嘘をついてまで休んだかという、今日はある重要人物とのエスカウントを取るためだ。

その重要人物こそ、中学時代支持率0%で生徒会長になり阿久根に指示を出し、

なおかつめだかに精神的ダメージを負わせた人物

そう、球磨川禊だ

さっきも言ったが、今日は球磨川と会うために休んだのである
なぜすぐに会いに行かなかったかという、

実は驚くことに今まで俺の情報網に一度も引かなかったのだ
俺の情報網はそんなにすごいのかとお思いだろうが

俺の情報網はこの国にどんな人物が入国したかまで分かるのだ
勿論不法入国であろうとだ

その情報網に今まで引かなかったのだから
凄まじいものである

そして、球磨川の居場所を掴んだのが今日の早朝だというわけである
今は球磨川が現在進行形で潰している学校に向かっているとところだ

……脳内ナレーションしてる内に着いた

さして、どこかな、球磨川は

まあ、こう探してはいるがそこら辺にはボルトで貫かれた生徒や先生がいるわけで

かなりグロッキーなわけだ

ん？何で俺は平気なのかって？

ふっふっふ、俺は常日頃から精神的訓練を積んでいるのだ

このくらいということはない

ドグシャ

たった今生徒をボルトで貫いた球磨川を発見

「おーい、君が球磨川君？」

球磨川が振り向く

「『君は誰？』」

「俺は氷剣刀哉で言うんだけどさ

よければ友達になってくれよ

都合のいい時だけ……」

「『ふうん』」

球磨川が近付いてくる

その時

グシュッ

球磨川の持っていたボルトが俺の頭に突き刺さる

「『あーあ、死んじゃった』」

「誰が死んだって？」

俺が球磨川の後ろの現れる

ん？お前は死んだんじゃないかって？
はっはっは、あれは俺が万華鏡写輪眼の月詠で見せた偽物さ
つまりここは俺の精神世界ってわけ
いつ球磨川に万華鏡写輪眼をかけたかって？
球磨川が振り返ったあの時だ

「『？』」

「おっと、下手なことはするなよ
ここでは俺がルールだ」

それでも球磨川は俺に向かってくる
だが俺はその勢いを利用し球磨川を転ばせる
そして

ズガガガガガ！

幾つものボルトをわざと球磨川のすぐ近くの地面に突き刺す

「あんまり調子に乗るなよ
で？俺と友達になるのか？
球磨川君？」

「『……うん、君とはいい友達になれそうだね
よろしく、氷剣君』」

「ククッ、どうだか…
まあよろしく」

そして俺は万華鏡写輪眼を解く

「『じゃあ、また今度
会えたらね』」

「ああ」

そして俺は家に帰った
ちなみに、球磨川の電話番号とメールアドレス教えて貰った

球磨川禊（後書き）

ありがとうございました

風紀委員長（前書き）

十六話目です

よろしくお願いします

風紀委員長

現在俺は普通に学園生活を送っているのだが

昨日風紀委員から連絡があり、今日行動を起こすらしい

まあ、原作見てるから知ってるけどね（笑）

俺は風紀委員長と共闘してめだかを潰せとのことだ

つまり、放課後までお役御免ということだ

いやー、楽しみだなあ

めだかの乱神モードとの勝負

キング○リムゾン

そして放課後

早いなあ、時間が経つのは

ん？明らかに飛んだだろって？

ハハハ、気にしなーい気にしない

お、雲仙だ

「おい氷剣、昨日聞いてあるだろうな？」

「ええ、連絡が入っています

ですが、雲仙先輩の戦い方ですと、俺が巻き込まれますから

雲仙先輩が戦った後に俺が止めをさす、という形でどうでしょう？

いくら雲仙先輩が強いと言っても、あの生徒会長に単独で勝てる
とは思えません」

「よし、それでいいだろう

後、これを持っておけ」

「何ですかこれ？」

「風紀委員に渡されるトランシーバーだ」

「いいんですか？こんな貫っちゃって」

「構わねえ」

「じゃあ、雲仙先輩の少し後ろにいますので
気配を完全に消すので、いないとか思わないでくださいよ」

「わかった」

「それじゃあ、また後で」

そして俺は人混みにまぎれ気配を消す（日之影の知られざる英雄を
ミスターアンノウン
発動する）

＼氷剣side out＼

＼雲仙side＼

っ!?

本当に完全に気配を消しやがった
……だめだ。最早存在自体が認識できねえ
本当に何者だあいつ

＼雲仙side out＼

（氷剣 side）

今雲仙が来ているのはオーケストラ部
…なるほど、こりゃ確かにうるせえわ

ドガアアアンツ！

うお！

びっくりしたあ…

そうか、雲仙がここの壁ぶっ壊したのか

「なるほど、確かにうるせえ訳だ

こんな蹴り一発でぶっ壊れちまうんだからな

どーもー、僕ちゃん風紀部長の雲仙冥利でーす

本日は皆さんを肅清しに来ましたー

皆さんが発する騒音が公害レベルにうっせーつつう苦情がチクリ

近隣の部活動から殺到しております、

ゆえに適切な処理を取らせてもらいたいと思いまーっす」

「（とうとう委員長が来ましたよ

どうするんですか部長）」

「（大丈夫だ。今まで通り対応すれば問題ない

それに相手は子供だ

飴でもやれば機嫌直して帰るだろう）

いやー、申し訳ございません

次回からは気を付けますので」

そして飴を差し出す

……いや飴で許されるわけないでしょ

「おゝいゴラ！」

風紀委員会に賄賂や言い訳が通じると思ってたんじゃないぞ！
俺が出張ってきた時点でテメーは死刑確定なんだよ！
殺戮してやるから迅速に死亡しろ！！」

バキッ

「う、うわあああああ！」

部長の腕が折られた

ボガッ ドゴッ バキッ

そして鬼瀬到着

「い、委員長

タオル持ってきました

(どうやればこんなことになるんだ
いくら何でもやり過ぎ過ぎる！)」

「おお、鬼瀬ちゃんサンキュー」

お、めだか来た

＼氷剣side out＼

＼雲仙side＼

「雲仙二年生、これはどういうことか説明してもらおうか」

「どういふことも何も、こいつらを静肅しただけだぜ？」

「話し合いをした上でなのだろうな？」

「はぁ！？」

話してわかるか！

事情なんか知るか！

ルールを破ったやつが罰を受けるのは当たり前だろーが！

それをなあなあにボカしちまったら事情がありゃ許してもらえら
って

同じこと繰り返すに決まってるだろーが！！

それに……お前こそそんなことしてていいのかよ？

俺がお前以外の生徒会の奴らに刺客を向かわせたぜ？

まあ、今から行っても間に合わねーだろーけどな」

「ッ！

不知火、今度和洋中の料理を食べさせてやる

だからここは任せた！」

ダッ！

雲「今から行って間に合うわけねーだろーが！」

そして俺はスーパースポールを投げる

ドドドド！

だが………

「チッ！カモフラージュか
おいそこ退けよ」

「いいんですかあゝ？そんなことしちゃって」

「なに？」

「だって、風紀委員ってルールを破った人のみに罰するんですよ？
私は何もルール破ってないから、罰することって出来ないですよ
ね？」

「ふん、まあいい……………
おい」

俺は氷剣へ連絡する

「はい、何でしょう？」

「話は聞いてただろ
黒神めだかを追え」

「了解」

ブツッ

連絡は終わった

「雲仙先輩、今雲仙先輩が生徒会長を追うようにいったのは誰ですか？」

「バケモンだ…しかも最強のな」

＼雲仙sideout＼

＼氷剣side＼

俺は今めだかを追っている

まず喜界島の所に着いたがめだかのラリアットで風紀委員をノックアウト

次は阿久根のところ

だがここもめだかの一蹴でノックアウト

最後の人吉のところは呼子の持っていた鎖をゴールテープに見立ててゴールした

「走りに自転車に人海戦術

ゴールテープまで用意していてくれるとは
なかなか気の利いた鉄人レースだったぞ」

その頃雲仙は……

「委員長、実は、増援に向かった40数人の風紀委員なんですが
全員黒神めだかに突破されたそうです」

「まったく

どれだけバケモンだったら気が済むんだ」

雲仙自身がめだかを潰しに向かっていた

風紀委員長（後書き）

ありがとうございました

乱神VS最強（前書き）

十七話目です

主人公が少し悪役染みてるかもしれません
よろしくお願いします

雲仙に文句言っでやる！
トランシーバーで

「ちょっと雲仙先輩！
いきなり爆発させないで下さいよ！
死ぬかと思ったじゃないですか！」

「ハッ！
テメーはこの位じゃ死なねーだろーが！」

グッ反論出来ない！

「にしても雲仙先輩って、なんで無事だったんですか？」

「ああ、風紀委員会の特服、スノーホワイト白虎のお蔭だ
これ着てればダンプにはねられても大丈夫だからな
ハハハ

連中は大方、爆風にでもやられたか？」

ガラッ

瓦礫の中からめだか達が出てきた

「アレだけの爆発の中で……
ウソだろ」

「簡単なことだ
まず近くにあった花瓶の水をかけ不発するようにし
その後出来る限りのボールを部屋の外に蹴り飛ばした
だが私は爆発よりも爆風の方が危険だと思い、こやつらをロツカ

ーの中に入れた
だがそれだと誰かが外に出てロッカーの戸を閉めなければならない
それで私がロッカーの戸を閉めた訳だ」

「な!？」

そりゃ驚くよなー

あの一瞬でそんなにできたんだから自分だけ助かろうと思えば出来
た筈なんだからな

「流石はバケモノだな

だがそんな事しても俺を殴ることはできねーんだろ？
お前はすべての人間を救いたいって言ってたじゃねーか
ハハハハハハハ!

「……うるさい」

「ああ？」

「……哀れなことだ

貴様もかつては人間の生前を信仰する心優しき美少年だったに違
いない

情状酌量に値するだけのきっかけがあって

そのような残虐無比な性格を帯びてしまったとしか考えられん
しかし、だからと言って
私は貴様を許さない!!」

グオッ!

ツと

すげえ覇気だな

にしても雲仙、あいつにとって敵にしちゃいけない奴を敵に回しちゃったな

そう、俺でもあまり敵に回したくない

怒り乱れる神（黒神めだか）を

「雲仙二年生、貴様の言う通りだ

私と貴様はそっくりだよ

私も貴様と同じで、自分を正しいと思ったことなど一度もないもつという方法はなかったか

ちゃんと他人の役に立てているか

起こりうるすべての可能性を考えたか

誰かの悲しみを見落としていないか

気付かぬ内に易きに流れていないか

人に助けることに慣れてしまっていないか

いつだって迷っているしいつだって怖い

私は正しくなんかない！

正しくあるうとしているだけだ！！」

「ハッ！どっちだって大して変わんねーだろうが！」

「貴様にはわからんだろうな雲仙二年生

だが私は貴様ほど大層な信念など持ち合わせていない少なくとも大切な人達を傷つけてまで貫く信念はな！」

「ケッ！

勝手に俺に俺を悪人みたいにしてんじゃねーぞボケ！」

バラバラララ

「まだ火薬玉を持っていたのか

貴様は私の聖者っぷりが気に入らないのだろうか？

ならばガツカリさせてやろう

私が怒りにまかせて人を傷つけるつまらない人間だと知れ！！」

ドガッ！

バキッ！

ドンッ！

めだかが雲仙を殴り飛ばした

たった三発のパンチがダンプよりも強いのかよ！！

だが雲仙も立ち上がり

「はあ…はあ…

俺は風紀委員の看板背負ってんだ

ここめだかをしょっ引かなけりや……

正義じゃねえ！！」

（。□。）

雲仙

アンタは男、いや…漢だ

でも、度が過ぎているぞ！

雲仙はめだかに突っ込んでいった

ドガッ

やはりめだかに殴り飛ばされてしまったが…

グッ

「?」

「今お前を縛ってんのは鋼糸玉アリアドネ

いくらお前でも切れねーぞ

正しい正しくないとか言う前に正義は必ず勝つんだよ!!」

ゴゴゴゴゴゴ

? 地響き? いやこれは…

「糸の方は頑丈でも校舎の方はそれほど頑丈ではなかったようだな」

「ま、まさか…」

めだかが校舎ごと引っ張っているのだ

「私は生徒会長だぞ?

学校の一つや二つ、動かせんでどうする!!」

ゴゴゴゴゴゴ

「皆、この件が終わったら

生徒会役員バッチを返してくれ」

そしてめだかは雲仙の前に立つ

「確かに戦いには負けたが勝負には負けてねーぞ」

「なに？」

「今でも俺は人間が大嫌いだからな
この信念は曲げるつもりはねーよ」

「ならば、私は人間が好きだ
この信念は貴様と同じく曲げるつもりはない」

「そうかよ…
止めをさせ」

「分かった
止めを刺そう」

そしてめだかは雲仙に止めを刺そうとするが…

ガシッ

「離せ
貴様ら、巻き込まれたいのか？」

「そう、巻き込まれたいの」

「やり過ぎだぜめだかちゃん」

「何処までも付いて行きますから」

「（あのバケモノを一瞬で止めたこいつは一体…？）」

さて、そろそろ行きますか

パチパチパチ

「！」

「今頃のご登場か…」

「どういうことだ？」

雲仙二年生」

「おっと

その状態は解かない方がいいぜ」

「？」

「いやー、惜しかったですねー雲仙先輩」

「ケッ

惜しいもんかよ

で？俺は負けたがテメーはどうすんだ？」

「そんなの決まってますよ…

ここで黒神めだかを潰す」

「！？」

「好きにしろ」

「ええ、あなたの役割はもう終わりましたから
退場してくれて構いませんよ
あの計画からもね」

「!？」

「テメーなんでその事を知ってやがる！」

「話すわけないじゃないですか
さて、生徒会長

手加減無しでいきますから
と言っても、あなたの場合は戦う理由がない、故に戦わない、と
か言いそうですからね
まず戦う理由を作りますよ」

シュン

まず瞬歩で移動し

ドガッ

人吉を蹴り飛ばす

「! 貴様アアアアア!」

めだかは怒って俺の腹を殴る
だが

「そんなものですか?
生徒会長の實力は」

オフエンスアーマ
窒素装甲には効かなかった

そして俺はめだかの足を払いめだかを蹴り飛ばす
めだかは校舎の壁にめり込む
だがそれでも

「アアアアアアア！」

めだかは向かってくる

ドドドドドドドドドドドド

めだかと俺のインファイト
つまり殴りあいとなる

「そろそろ終わりにしますか」

ドオオン

俺はめだかを仰け反らせ

ズドオオオン！！

かかと落としを決める

「なかなか楽しかったですよ
あなたを完膚なきまでに潰そうと思いましたが
気が変わりました」

嘘だ

もとよりめだかを潰すつもりなどない
今回の目的はちょっとした実力を知らしめるためにめだかと戦った
にすぎない

「それじゃあまた」

そして乱神と最強の戦いは終わった

後日、理事長室で

「やはり氷剣君は異常アブノーマルを持っていますねえ
雲仙君がリタイアして、代わりに黒神君を入れようと思っています
したが

氷剣君も入れたいですねえ」

「どっちにしても、あたしは気に入ってるよ？

氷剣のこと」

「まあ、なんにせよ

後日、ここに来てもらいましょうか

私がい実際に見て決めます

それでどうでしょうかね

袖ちゃん」

氷剣の知らぬところで彼が巻き込まれようとしていた

乱神VS最強(後書き)

ありがとうございました

フラスコ計画 序（前書き）

今回は短いです

フラスコ計画 序

こにゃにゃちわー

氷剣刀哉ですー

今は理事長室に呼び出されてめだかと一緒に向かっているところです
だけどねー

前回人吉蹴っちゃった上にめだかを負かしちゃった訳じゃん？

だからめだかが俺に対してかなり殺気を放っている訳よ

いや殺気自体はそんなでもないんだけど、お互い黙ってるから気ま
ずいんだよね…

そして理事長室

「いやはや、先日は大変立ったようですねえ」

「ええ、まあ、私もまだまだと言うことでしょう」

「さっさと本題に入ったらどうですか？

俺達を呼び出したのは、そんな世間話をするためじゃないでし
ょう？」

「まあ、そう焦らずに

あなた達はどうして天才がいると思いますか？」

「理事長、この世に天才などいません

いるのは努力家な人間です」

「俺は神が作り出した気味悪い化け物だ、と思っています」

「ふむ、考え方は人によって違いますねえ
では次はこの6つのサイコロを振ってみて下さい」

そして俺達はサイコロを振る
めだかは原作と同じくサイコロが一行に積まれた状態になった
因みに俺はめだかの結果を見ながら振ったのでまだ見ていない
俺は：

ナニコレ？

サイコロが積まれているだけでなくサイコロの目が全て同じ方向に
向いている

何だよ

「これは興味深い結果ができましたねえ

私は何故天才がいるのか？それを研究しているのです

そして、人工的に天才を作ろうという計画があるので

その名も

フラスコ計画」

「何が言いたいのですか？」

「君達にもフラスコ計画に加わって頂きたいのですよ

実はさつきサイコロを振ってもらったのは異常であるかそうでな
アブノーマル

いかを確かめる為なんです

ですが、これで分かりました

あなた達は明らかに異常何です！」
アフノーマル

「私は遠慮させていただきます

私は天才や才能などに興味はありません」

「理事長、意見させてもらってもいいですか？」

「何でしょう？」

「人工的に天才が作れたら、天才であることが普通になり、天才は天才と呼ばれなくなります

天才は他の人よりも優れているからこそ天才と呼ばれるんですから」

「つまりあなたも加わるつもりは無いと言うことですか」

「そうです」

「分かりました
もう退室して構いません」

「それでは、失礼します」

「じゃあ俺も：そうそう理事長、言っておきますけど」

ドドドドス！

そして俺は三代目風影の血継限界で作った数本の砂鉄の槍をわざと外してソファーに突き刺す

「あまり人のことを嗅ぎまわらないでもらえますか？
そうじゃないと…」

迅速発動！

シュン

ドス×7

「この十三組の十三人サートイーンパーティーの皆さん、再起不能にしますよ？」

我ながらよくこんな事言えるなー

「!？」

(バカな！いくらなんでもでたらめ過ぎる！
プラスシックス
裏の六人がいないとはいえ、この7人を一瞬で気絶させるなど！)
わ、分かりました
君を詮索するのは止めましょう」

「物わかりがよくて助かります
では、失礼します」

「ふう

彼の力は強大過ぎますねえ
私の手に収まりきるかどうか…」

フラスコ計画 序（後書き）

ありがとうございました

フラスコ計画 前編

俺は今、箱庭学園旧校舎、ゴーストバベル軍艦塔に向かっている
黒神めだかの兄である黒神真黒に会うためだ
さーて着いた

「すいませーん

黒神真黒さんはいらっしやいますか？」

「僕が黒神真黒だけど、何か用かい？」

「はい、あなたの妹の黒神めだかさんの事なんです
単刀直入に言います

黒神めだかは近々ここに来る」

「どう言うことだい？」

「めだかさんは全ての人間を救いたいと言っていました
でも、最近はその出来ていない

するめだかさんは性格からして更なる力が必要とするはずだ
となると、今でも十分に強い力を更に上げることが出来るのは

あなただけになるんですよ真黒さん

それに乱神モードの質も落ちている

それこそ、唯一めだかさんに影響されなかった人物を力によって
排除した時よりもね

それじゃ俺はここで失礼します」

「！？待て！

君は何故それを僕に知らせたんだい？」

「めだかさんにはもっと強くなってもらわなくてはならないからです」

そう、来るべき一（マイナス）との戦いに備えて

と言うか、俺立場的に一（マイナス）のはずなのになー

まあ、強くなっためだかとも闘ってみたいし

…軽くバトルマニアになりかけてるかも

「じゃあ、めだかさんのトレーニングメニューでも考えててください失礼します」

その頃生徒会は

「さて、今日の議題は氷剣同級生の件だ
今回は雲仙二年生にも来てもらった」

「あいつは規格外過ぎる

風紀委員でも指折りの奴らを一瞬で片付けやがった」

「あいつの力は半端ないぞ

柔道では阿久根先輩を瞬殺し

乱神モードのめだかちゃんを圧倒した」

「しかも、雲仙二年生の炸裂弾による爆発でも無傷だった」

「じゃあ、めだかさんよりも強いってことですか？」

「その通りだ

しかも、あやつは入学して間もないころから
フラスコ計画の存在を知っていたということで間違いないだろう」

「じゃあどうするんですか？」

「仕方あるまい

ひどく気は進まんが私の本気を思い出すためだ
明日、兄貴を訪ねてみるとしよう」

「あの人のところ行くのか……」

「人吉、一緒に来てくれ……」

「ああ、分かった」

フラスコ計画 中編（前書き）

更新遅れてすいません

20話目です

久しぶりに見たらお気に入り登録数が300を超えてました！
これを見てくれていた皆様に感謝です！

フラスコ計画 中編

俺は今、学園内を散歩している
ん？何だこの無駄に大きい威圧感

「跪け（ヒザマズケ）」

この正に唯我独尊みたいな言い方は……

「ふむ、姿勢がいいな

お前には王たる俺の配下になる素質がある」

都城王土

他人は俺の役に立つため生まれてきたと豪語する史上最大の俺様主義者

「噂通りの王様っぷりですね
都城先輩」

「誰だ？」

「唯のしがない庶民ですよ
王様」

「そうか
では庶民よ
跪け（ヒザマズケ）」

なるほど

確かに並大抵の奴じゃこの重圧には耐えられないな
だが俺にとっては何の障害にもならない
イマジンプレイカー
幻想殺しがあるからな！

「何か言いました？王様？」

「貴様、中々やるようだな」

都城は少し感心しているようだ
そりゃそうだろ

今の俺は抵抗や踏ん張っていると言うつもりはない
全くの自然体だ

「そりゃあどうも」

……ここに近づいてくる気配が一つ
めだかか

人吉が立ち上がろうと力を入れるが無駄だ
今のお前じゃあな

「おっと

革命を起こそうなんて思わない方がいいよ
都城王土の真骨頂『言葉の重み』

誰も王の命令には逆らえないんだからね」

行橋未造

彼、いや彼女の異常は受信感度

アフノーマル
脳が活動する際に流れる電気信号が体外に漏れ出た電磁波を皮膚で
受信することで人の考えを読むことができる

だが、感度が良すぎるため受信する情報の選択ができない
痛みや悲しみも感じてしまうのである
つまり、長所でもあり短所でもあるということだ

お、めだかが来たか

「め、めだかちゃん!!」

「来たか…」

「都城三年生、善吉がだいぶお前に世話になったようだな」

「だったらどうする？」

「善吉を返してもらおう」

「ふん、そうかならば

平伏せ『ヒレフセ』」

ドオオオオン

めだかが文字通り地面に平伏した

「くっ！」

「羨ましいな

自分よりも上の存在がいるとは
王たる俺にはない体験だ」

………なんと言う俺様主義

「俺はお前に惚れた
一目惚れだ！」

「あっ……え……？」

そういう事を堂々というか？
めだかもう訳分かんなくなってるんじゃん
助け舟出すか

「あのー、いい雰囲気になってるとこ悪いんですけど
そこら辺にしておけばどうですか？」

「ふん、まあ良かろう
黒神めだか、異常おれたちの下に来い
通常ノーマルなどに己が存在を消費するな
明日の日の出前、この学園の屋上に来い」

そう言って都城は去って行った

「全く、破廉恥極まる男がいたものだ
不本意ながらこの逢い引きに応じ生徒会長として更正してやる必
要があるな」

「それじゃあ
俺はそろそろお暇させていただきですか」

「残念ながらそうはいかんぞ氷剣同級生
貴様には聞きたいことが山ほどあるのだ
一緒に来てもらおうか？」

「断ると言ったら？」

「拒否権は無い」

そうなりますよねー

でもここで捕まってたまるもんですか

「なら、力づくでも突破しますよ」

（人吉 side）

都城の言葉の重みから解放された俺はめだかちゃんとの間に氷剣を挟むように立っていた

俺は氷剣の言ったことが信じられなかった

この状況で俺とめだかちゃんを一度に相手をして突破する？

はつきり言って無理なんじゃないかと思う

そう思っていると氷剣が腰のベルトにつけてあるケースから何かを周りに振りまいた

見たところ砂鉄のようだった

こんなものでどうするつもりだ

すると、砂鉄が何かに意思を持っているかのように氷剣の手に集まり刀のような形になった

「これ、表面を超高速振動させて切れ味を増すようにしてあるんですよねえ

だから…」

ザンッ！

「人の体も簡単に切れちゃうんですよねえ」

氷剣は俺の腕を持っていた

なんで氷剣が俺の腕を持ってるんだ？

次の瞬間

俺は右に激しい苦痛を覚えた

そしてやっと理解した

ああ、俺の腕は切られたんだ

「善吉イイイイイイイイイイイ！！！！」

泣き叫ぶめだかちゃんを見て、俺は気を失った

＼人吉 side out＼

＼黒神 side＼

善吉の腕が切られた

私にはそれが理解できなかった

いや、理解したくなかった

「やれやれ

人吉君の実力はその程度でしたか」

その言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが切れた

＼黒神 side out＼

氷剣 side

「アアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

めだかは乱神モードに入っているが前回とは違い自我を保てていない
よっぽどショックだったんだろうなー

まあ、やったの俺だけど（笑）

っと、ふざけてる場合じゃねえ

にしても、めだかをどうやって止めようかな

下手な攻撃じゃ絶対に気絶しないだろうし

そうだ！あれやろう！

俺はめだかの真下にあった砂鉄を鎖の形にしてめだかの動きを封じた
そして一枚のコインを出す

この時点でお気付きの方もいるだろう

俺はこの日初めて人に向けてあれを撃った
レールガン
超電磁砲を

ズガアアアン！

地面が抉れている：

これでも威力はかなり抑えたほうなんだよなあ

さて、肝心のめだかは：

20メートル位吹っ飛んで気絶してる

その後、人吉とめだかを生徒会室の前に置いて帰った
ん？めだかの怪我と人吉の腕？

オールマイクシオン
大嘘憑きで全部治したよ？

フラスコ計画 中編（後書き）

ありがとうございました
もうすぐ試験なんですよねえ
心配です

フラスコ計画 後編（前書き）

21話目です

よろしくお願いします

フラスコ計画 後編

俺はあの後家に帰った

「ただいまーって誰も居るわけ……」

「お帰りー」

…は？

「何でいんだよ」

ま、まさか俺の命を狩りに来たのか!？

「いや、全くの別件じゃ」

なんだよびつくりするだろー

「お主が勝手に勘違いしたんじゃろ」

あれー

そうだっけ？

「で、その要件って何？」

「実はな、お主をこの世界に送った後に分かったことなんじゃが
お主には生まれつき過^{マイナス}負荷があることが分かったんじゃ」

「マジですか？」

「マジもマジ、大マジじゃ」

「で？で？」

どんな能力なんだよ」

生まれつきということでおさら気になる

「うむ、それで能力じゃが

はつきり言ってかなりエグいぞ

相手に痛みを与えるだけの能力じゃ

相手に一度でも触らないといかぬがな」

は？何それ？

「しかも入切が可能、強弱が調整、体のどこに痛みを与えるかの選択ができる」

マジかよ

チートな俺らしい過^{マイナス}負荷だな

「つーことはじわじわと痛みを与えることも爆発的に痛みを強くすること出来るのか？」

「可能じゃ」

うわー

「じゃが、お主はそれがまだコントロールできておらん」

「じゃあどうすんだよ」

「お主の訓練次第じゃ」

仕方ねえ

今から訓練するか

「頑張るのじゃぞー」

って何か手伝えよ！

「いやじゃ………なんかめんどいし」

この野郎…

「じゃあわしはもう帰るぞ
じゃあの」

「あ、待て
ってもう居なくなりやがった」

さて、今から訓練しますか

そして次の日

ヤベエエエエエエ！

コントロールすんのにかなり時間食っちゃった
俺は急いで空間移動テレポートで地下十三階まで移動した
さーて、今どの場面だ？

「ごめんなさい」

おお！ナイスタイミング！

「これにて一件落着ウ！」

さあて、そろそろ行きますか

「いやー、いいお話ですねえ」

「!？」

「死闘を繰り広げた相手は改心し皆さん仲直りでめでたしめでたしでもこれで終わりますかね？

最後に最強のラスボスが出てくるって物語では王道なんですよ」

「では、そのラスボスとやらは矢張り貴様か？」

「まさか、冗談は止してくださいよ

生徒会長の完成^{シ・エンド}なんて、相手にしたくないですからだから…」

俺は発火能力で火を発生させベクトル変換で火を巨人の形に変えていく

その巨人は…

「行け！

魔女狩りの王イノケンティウス！」

「ガアアアアア！」

イノケンティウスはめだか達の方へ向かっていく

「それじゃあ、頑張って下さいねー」

「おい！待て！」

何か聞こえるけど気にしない

そして俺はエレベーターで負け犬組と裏の六人が戦闘中の階まで行く

ここでは球磨川が全員を螺子で串刺しにしていた

「久しぶりだな球磨川

いや、球磨川先輩って呼んだ方がいいか？」

「『ううん、今まで通り球磨川でいいよ

だって僕たち友達じゃないか』」

「あ、ああ、そうだな」

球磨川だけは真意が掴めねえ

漫画でも知ってるけどヤバすぎる

その頃めだか達は…

「くっ

どうすんだよめだかちゃん」

「慌てるな

形がどうであろうと火だ
火は消火すればいい」

プシュー

めだかは近くにあった消火器をイノケンティウスに当てる

「ガアアアアア!？」

イノケンティウスは行きなりのことで怯んだ

「(そろそろイノケンティウス消すか)」

イノケンティウスは只の火となり、やがて消えた

「いったい何だったんだ」

「分からん

とにかく、地上に戻るぞ」

場所は戻って氷剣&球磨川

「来たな」

「『?』」

チーン

めだか達を乗せたエレベーターが到着したようだ

「『久しぶりめだかちゃん

僕だよ』」

「ッ！？球磨川！？」

そして、過^{マイナス}負荷編が始まる

因みに過^{マイナス}負荷の名前は永^{エターナル}遠^{ペイン}の痛みにした

フラスコ計画 後編（後書き）

もう9月なのにまだ暑いですね

私は家でゴロゴロする日々を送っています

そういえば、試験の前に自然教室があるんですよ

いやあ、楽しみですねえ

皆さんは自然教室や農山村留学で思い出深い出来事ってありますでしょうか？

マイナス編 序（前書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありません
期末テストに向けての勉強で書く暇がありませんでした
いよいよマイナス編です
それではどうぞ！

マイナス編 序

あの後、俺と球磨川は理事長室に来ていた
と言っても、俺は理事長室の外で球磨川が出てくるのを待っている
のだが

「お？氷剣じゃん
どこかしたの？
おじいちゃんに用？」

不知火がやってきた

「おじいちゃん？
ああ、お前は理事長の孫だったっけ」

「うん、そーだよ
で、おじいちゃんに用でもあるの？」

「いや、理事長に用があるのは俺の連れ
俺はその連れが出てくんのを待ってんだ」

「へえ、連れってだれ？
人吉？」

「まさか！お前も知ってんだろ？
俺は生徒会と敵対関係みたいな立ち位置にいるってこと」

「あー、そーだったね
じゃあ氷剣の連れって誰なの？」

「ああ、転校して来たばっかの球磨川って奴ここに転校してくる前からの友達でさーだからなんだよ」

「ああ、なるほど」

ガチャ

球磨川が出てきた

「『ゴメンゴメンかなり待たせちゃったかな?』」

「いや、構わないん?

どうした?」

「『んー、どこかで会ったことあったっけ?』」

「何言ってるんですか?

アタシとは初対面ですよ

それに、ここはアタシの食事場です
摘み食いすんじゃないよ?

喰らうぞ!」

「『あーそうだよね

僕と君は初対面だね

これからよろしくね不知火ちゃん』」

「だそうだが？」

「あひゃひゃひゃひゃ

アタシこそよろしくお願いしますよ？

球磨川先輩」

「『うん、それじゃあ行こうか？氷剣君』」

「ああ、じゃあな不知火」

そして俺たちは理事長室を後にした

「『あ、そうそう

氷剣君もー（マイナス）十三組に編入することになったから』」

「マジで？」

「『マジで』」

マジかよ

まあいいか

その方がいろいろ面白そうだし

そういやもうすぐ人吉の母親が来るころだっけ？

何て名前だったけな？

人吉…卑弥呼？

いや卑弥呼様じゃねえよ！？

うーん…

あっ！

思い出した！

瞳だ！

人吉瞳！

ー（マイナス）を持っている子を専門に診て、「免許を持ったブラックジャック」とさえ言われた名医

見た目は小学生だけど

うーん会ってみたいなー

て言うか会っちゃおう

うんそうしよう

「俺ちよつと用事あるから
またな」

「『うん、またね』」

さーて、人吉瞳はーつと

シャー

どこかなー

シャー

…今のじゃね？

そして俺は振り返る

…いたよ

見た目小学生の四十一歳が
名探偵コ○ンもビックリだよ
早速話し掛けてみよう

「ねえ、君って迷子？
名前は？」

「名前？」

私は人吉瞳だよ」

「人吉って

もしかして善吉の妹かなんか？」

「うん、そんな感じ」

「へえー、そうなんだ

じゃあそろそろ行くから
じゃあな」

「うん、またねー」

っは！？

いかんいかん

普通の小学生を相手にしてるように話してしまった
まあ、接触できただけでも良しとしようか
となると、次は日之影か？

いや、いいだろ

どうせ近い内に顔合わせるし
さーて、帰ろつと

ー（マイナス）編へのタイムリミットは刻一刻と近付いていた

マイナス編 序（後書き）

ありがとうございました

そういえば、宇宙戦艦大和の実写版が冬に上映されますね

僕は観に行きます

皆様方はどうでしょうか？

マイナス編 前編（前書き）

どうも

今回は主人公がまさかの……！

マイナス編 前編

次の日

ー（マイナス）十三組に編入していた

はつきり言ってるんだ

授業ないし

でも教室は自分で調達しろって言うからなー

今は学校内をブラブラしている

あれ？

いつの間にか軍艦塔ゴーストバベルに行き着いてしまった

たしかここでは名瀬と真黒が古賀を治療してるんだったな

あ、江迎だ

そうなるにあの後はあの中に入って行くはずだ

よし

混ざろう

実は江迎とは朝一度会っていて球磨川に紹介されているため普通に話したりする

「おーい、江迎」

「ああ、氷剣さん

何でしょうかあ？」

「いや、こんな所でどうしたのかなーと思って」

「理事長がー（マイナス）十三組は教室がないから自分たちで用意しろって言ってたじゃないですかあ」

「ああ、たしかに言ってたな」

「だからここを」（マイナス）十三組の教室として頂こうかと思いましてえ」

「なるほどな」

よし、俺も手伝おう

二人の方がいいだろ」

「そうですねえ

ではお願いします」

「ああ、じゃあ行くぞ」

ガチャ

「初めましてえ

一年一（マイナス）十三組「虹色の薔薇」レインボーローズの江迎怒江と言います
一（マイナス）十三組は教室がまだ無いのでこの軍艦塔ゴーストバベルを問答無
用で明け渡してもらえますう？」

「ならば僕も自己紹介しよう

僕の名は黒神真黒

ゴーストバベル
軍艦塔管理人にしてフラスコ計画元統括
チェックメイトマジシャン
かつては「理詰め魔法使い」と言われた男だ！」

何処の厨二病患者だよ…

チェックメイトマジシャン
「理詰め魔法使いですか

いいですねえ

でも如何でしょう

レインボーローズ
虹色の薔薇ことこの江迎怒江に勝てますかねえ？」

「(乗ってきたあ!?)」

「これはこれは、問答無用と言いながら丁寧な自己紹介をありがとうございますあ! 君たちも高らかに名乗ってあげなさい!」

「い、嫌だ!

そんな空気の中では絶対に名乗りたくない!!」

「苦労してんなーお前

あんな兄貴がいてさ」

「もう慣れた」

「そうか」

俺たちの目の前では理詰めチエックメイトマジシャンの魔法使いと虹色レインボーローズの薔薇が闘っている

真黒の方はパンツ一丁でだ…

そして、真黒が追い詰められると…

「つたく、しゃーねーな

オレ
妹にもやらせろ」

名瀬が助けに入った

そうして闘っている内に江迎が劣勢になってきた

「二対一で闘うなんて、根性腐ってんじゃないですかあ?

流石にこれでは不味いので逃げますねえ」

「おい！待て！」

ドオン！

床を腐らせて穴をあけて逃げたようだ

「くっ、逃げられたか

それにしても、これはめだかたちに知らせた方がいいな」

「ホントですよー

危険ですもんねー」

「！？そうか、君も居たんだったな

しかし何故…

そうか、ミスターアンノウン知られざる英雄か！？

だが何故君が使える！」

「その通り

何故使えるのかはその内話します

さて、俺は今あなたたちを倒す力を持っています

しかも二人は戦闘が得意ではなく、唯一の戦闘員は負傷していて
闘えない

さあ、この絶対的ピンチをどう切り抜きますか？」

「ちっ！

（万事休すかよ

どうすりゃいいんだ）」

そして、三人の中の一人が俺の前に立ち塞がる
そいつは…

古賀だった

「こ、古賀ちゃん!？」

「へえ…」

「名瀬ちゃん

私がこいつを足止めするから、名瀬ちゃんはその内に逃げて!」

「そんな…」

俺は古賀の前に立つと古賀に殺気を当てる

「ひっ!？」

「へえ

あなたが俺を止めると?」

俺は殺気を更に強くする

「くうう……!」

「なら、やってみて下さい」

そして俺は古賀に向けて手をのばす

「古賀ちゃん！」

古賀に対し俺は…

頭を撫でた

「合格だ」

「え？」

「いやー、見事なもんですねー

自分は殺されるかもしれないのに、それでも友達を俺から逃がすために自分を犠牲にするなんて

君は普通の人間なんかじゃない

優しい心を持った特別な人間だ」

そして頭をナデナデする

いやね、俺の方が身長高いからさ、撫でやすいからつい撫でちゃったんだよね

「ふえ！？

え、えと……／／／／／」

「とゆー訳でサヨナラー」

エレポート
空間移動でその場から離れる

「（な、なんだったんだろ
でもなんか、心地よかったかな……／／／／／）」

「古賀ちゃん！
大丈夫か！？」

「え？あ、うん
大丈夫だよ」

「そうか」

「それにしても、何故彼は僕らを見逃してくれたんだろうか？
とにかく、めだかたちの所に行こう」

「ああ、そうだな」

そして三人は生徒会室に向かった

マイナス編 前編（後書き）

ありがとうございました

古賀にまさかのフラグを立ててしまいました

誤解（前書き）

今回はかなり短いです

誤解

氷剣が去った後、名瀬は古賀の様子が少しおかしいことに気が付いた
そして、名瀬はその頭の回転の速さからあることを疑い始めた
古賀が氷剣に惚れてしまったのではないか
そして名瀬はある実験をすることを決めた

「なあ、古賀ちゃん
ちよつといいか？」

「ん？何、名瀬ちゃん？」

ナデナデ

「え？な、何を？／＼／＼」

「（うーん、これだけじゃ分かんねえな
仕方ねえ、お兄ちゃんにも頼むか）
おーい、お兄ちゃん」

「何だい？くじら」

「ちよつと確かめたいことがあるからよー
古賀ちゃんの頭を撫でてくんねえか？」

「あ、ああ
お安いご用さ」

ナデナデ

「ふえ！？／＼／＼」

「やっぱりそうか」

「何がだい？」

「いや、もしかしたら古賀ちゃんが氷剣のヤローに惚れちゃったかもしんねえと心配したが、どうやら違ったみてーだ」

「え？どういうこと？」

「いいか？結論から言うぜ」

古賀ちゃんは氷剣のヤローに惚れちゃったんじゃないか
唯単に撫でられるのが好きなだけだ！」

「……………そーなんだ

なんか子供っぽくてショック…………」

ズズーン

「まあ、元気を出したまえ」

さり気なく真黒は古賀の肩を触ろうとするが……

ギロツ！

こんな時でも古賀は真黒が名瀬にメイド服を着せ、真黒をぶっ飛ばすという決意を忘れていなかったため、決して触らせようとはしなかった

こんな出来事があつたとは氷剣も含めて、誰も知る由もなかった

誤解（後書き）

申し訳ありません

この小説に恋愛系を入れると続けていける自信がないので古賀フラグは消させていただきました

恋愛系になるかもと期待していた読者様が居るならば本当に申し訳ありませんでした

一十三組対策会議と一十三組ホームルーム（前書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした
ユウト様感想有り難うございました

一十三組対策会議と一十三組ホームルーム

次の日

俺は球磨川と学園内を散策していた

「球磨川ー」

ー（マイナス）十三組の教室はどうすんだよ」

「『うーん、とりあえずそこら辺の教室にするよ』」

「いいのか？」

そんなに適当で」

「『いいんじゃない？』」

いいのか？

まあいいか

するとそこへ人吉瞳が来た

「!？」

「『あっ、人吉先生

会えて嬉しいなあ

だって初恋の人ですもん

あ、そうだ！今からエロ本買いに行くんでよかったら選ぶのに付き合ってくださいませんか？』」

そう言って球磨川は何処からか螺子を取り出す

「それはデートのお誘いかしら？」

「『んー、そうなりますねー』」

「残念だけど、今あなたのクラスの子が内の息子に色目つかしてんのよ

母親として見逃すわけにも行かないから、あなたには付き合えないわね」

「『そうなんですか

でも駄目ですよ人吉先生

自分の息子の恋は応援しなきゃ』」

どちかっていうと江迎が一方的に迫ってるだけだけどな

球磨川は瞳に螺子を刺そうと走り出す

だがそれを瞳は小柄な体を活かして回避する

しばらくその繰り返しが続きあたりには多数の螺子が刺さっているという状況になった

そこで、瞳はこっちを見ると少し驚いた顔をした

「あなた、何で彼と居るの？」

あなたは異常アブノーマルや過負荷マイナスのような能力があるわけじゃないようだし
かといって性格がおかしいわけでもない

あなたのような通常ノーマルを体現したような人間が球磨川君のような桁外れの過負荷マイナスと一緒にいるのかが分からないわ」

「ふむ、球磨川と一緒にいる理由ですか
そうですねー

強いて言えば面白そうだからでしょうね」

「面白そう？」

「そう、彼と居ると退屈しない
人生は楽しく生きなきゃ損ですからね」

「『へえー』」

じゃあ氷剣君は僕が面白人間だから一緒にいるってことなのかな？
『』」

「まあ、そんなわけ無いじゃないか！なーんて青臭いことは言わないけどな

お前の性格は結構気に入ってるし」

「『そうなんだー』」

そして球磨川が瞳から目を離す

瞳はその隙を利用し人吉の下へと急いだ

「『あーあ、振られちゃった

人吉先生、僕の初恋の人だったからショックだなー』」

「また会う機会だってあるだろう」

その時

グジュ

「ん？」

ドゴオオオオン

校舎が一つ腐った

「おいおい、いくら何でもやり過ぎだろ江迎」

「『まあいいじゃないか

誰だって失敗はあるよ

僕は彼女のところに行くけど君は？』」

「ああ、俺はちよーっとだけ人吉んところ行ってくる」

「『うん、分かった』」

そう言って俺は空間移動テレポートで人吉親子のところへ移動した

「お疲れ、人吉」

「「!」!」」

「江迎がしたみたいだな

そのお詫びと言っては何だが…」

そして、人吉親子へ手を伸ばすが……

ドカツ

「!」?」

「てめえ、お母さんに何する気だ！」

人吉が俺の腕を蹴った

「……何と言われても治療だけど？」

「そんなの信じられる訳ねえだろ！」

「信じないも何も実際に治療をしようとしているんだけどな」
怪我を治そうと思ったのに逆にこっちが怪我しそうになっちゃった
まあ俺にとっては無駄だけど」

「何が無駄なんだ！」

「自分で蹴っておきながら気付かないのか？」

人吉先生は気付いているようで

人吉君に説明してあげて下さい」

「善吉、あなたの蹴りは常人なら骨が折れている程の威力なのよ
相手が頑丈でも少なくともまともに決まれば痣ができて痛がる仕
草をする程のね」

「それが如何かしたのかよ」

「なのにこいつは痛がる仕草すら見せない」

「っ！？そういえば」

「これで分かっただろう？」

あんた達が如何足掻こうと無駄だという事が
大人しくしろよ
直ぐ終わるから」

私は人吉親子に触り
オールマイクシヨン
大嘘憑きで怪我を無かった事にする

「終了」

「本当に治ってやがる!?!」

「俺はこれで…」

テレポート
空間移動でその場から消える

「!?!居なくなりやがった…」

「瞬間移動……まさかね」

「とにかく、めだかちゃんの所に急ごうぜ」

「ええ、そうね」

その頃俺は屋上で人吉親子を見物していた

ピリリリリリ

「もしもし?」

「『もしもし

ああ氷剣君、もう暫くしたらー（マイナス）十三組のホームルームを始めるから早く来てね』」

「おう、分かった」

「『待ってるよ』」

テレポート
空間移動で移動

：最近使用率高いよな

そして、生徒会室では…

「それでは、ー（マイナス）十三組対策会議を始める」

「今ー（マイナス）十三組は、全国から過^{マイナス}負荷を持った生徒たちを呼び寄せているわ

そして、その中でも球磨川君を超えるかもしれない過^{マイナス}負荷を持つ生徒までいる」

「そして、一番問題なのは…」

「氷剣刀哉…」

「ねえ、誰？」

その氷剣って」

「俺達の傷を一瞬で治したあいつだよ」

「でもそんなに重要視するような人には思えないけど」

「いや、氷剣は計り知れない戦闘能力を持っています」

「乱神モードのめだかちゃんを手玉に取り、俺とめだかちゃんの二人掛かりでも歯が立たなかった」

「嘘……」

「でも、おかしいとは思わないか？」

「何がです？ 阿久根先輩」

「彼の力だよ
アブノーマル マイナス
異常なのか過負荷なのかさえはつきりしてないんでしょう？」

「ああ、今分かってるのは
いきなり現れたり消えたり、炎を出したり、砂鉄を操ったり、体
があり得ないくらい固くなるってことだ」

「確かにあれは並のバケモンじゃねーぜ
あいつが前に来た時、俺ですら身動きできねーほどの殺気出して
やがった」

「そして、もっとも不可解な事は……」

氷剣の人格だ」

「人格……か」

「球磨川君までとは言わないけど、異常や過負荷アブノーマル マイナスを持った子は、大なり小なり人格に影響がでるの

なのに彼の性格はどこにでも居るような普通の人格
例えるなら、氷剣刀哉というディスクに異常と過負荷アブノーマル マイナスのデータをインストールしたような感じね」

「善吉、氷剣とは一時期普通に話していたのだろう？
その時は何かなかったのか？」

「いや、特に変わったところは無かった
演技だったっていう感じでもなかったぜ？」

「やっぱり、ここは誰かに協力を求めた方がいいんじゃないでしょうか？」

「じゃあ、風紀委員会とかは？」

「それは雲仙二年生が戦線を離脱しているため、おそらく無理だろう」

「なら、鍋島先輩なら」

「「「（うーん、でもあの人卑怯だからなー（ですしねー）（なんだよなー）（だしなー）」」」」

「ふむ、ならば、日之影三年生を呼ぼう」

「あー、日之影先輩か
て言うかめだかちゃん、よく覚えてたな、あの人の事」

「誰ですか？その人」

「日之影空洞

第97代生徒会長

この箱庭学園を1年間守り抜き

ミスターアンノウン
「知られざる英雄」と呼ばれなかった男だ！」

「日之影空洞……？」

「どんな人なんですか？」

「あー、なんつーか

お前らはもう知ってる筈なんだよ

でもその人は誰も気付けないほどにさり気ない

全校生徒はおろか前生徒会役員ですら見つけることは出来なかった」

ここからは原作通りの展開

そして

俺以外の参加者が携帯電話で参加している一十三組ホームルームが始まった

「『ではこれより一十三組のホームルームを始めたいと思いまーす
司会進行は暫定的にこの僕、球磨川禊だよー

今日は早速だけど、新しいクラスメートを紹介するね
最近一十三組に入った……』」

「氷剣刀哉だ」

「はいはいはい」

「『何？不知火ちゃん？』」

「氷剣ってどんな過負荷マイナス持ってるの？」

「『確かに僕も知らないなあ』」

俺も気が付いたけど何で今まで聞かれなかったんだ？
まあそれは置いて…

「俺の過負荷マイナス エタナルベインは永遠の痛みといって、一度でも触った相手ならどんなに離れていても痛みを発生させる事が出来る
しかもどのくらいの痛みか、どのような痛みか、体のどの部分に痛みを発生させるのかまで決める事が出来る
つまりいきなり激痛を与えてショック死させることも可能だし、
じわじわと相手を行動不能にすることもできる」

結構万能なんだよな、この過負荷マイナス

「うわーお、てことは一度でも氷剣に触れたら終わりってことだねえ」

「まあそういう事だ
相手が生きている限り安全な場所なんて無いからな」

「『それにしても、僕が心配なのは、めだかちゃんと日之影君が手を組んじゃうことなんだよ』」

「そのことなら心配いりませんよ球磨川先輩」

「『ふうん

まあ、とにかく

一十三組ホームルームを……』」

バキィ！

「ねー！あたしの言った通りでしょ球磨川先輩

2人が組むことなんてないって。なにせその人一人で軍隊と戦えるんですから

あひゃひゃ」

「『えーと、誰？』」

「元英雄だ」

こんなに早く来るとは…

新（マイナス）生徒会、集結

こんなにも早く日之影が来るとは思わなかったな

「あ、それ

拳破ア、拳破ア……」

そろそろ行くか

「拳々破ア！」

ドガガガガガガ

俺は日之影と球磨川の間に割り込み拳々破のパンチを同じ威力のパンチによって相殺する

「!？」

お前、氷剣刀哉か？」

俺の事を知ってる？

めだか達から聞いたのか？

「ええ、そうですけど？」

「やっぱりか

黒神達から話は聞いている

かなりヤバいってな」

めだかどんな説明したんだよ

「『いいんだ氷剣君
僕を庇おうとしなくても』」

「何？」

球磨川が：泣いている？

「『僕は嬉しいんだ

僕の事をちゃんと叱ってくれたから

僕は待ってたんだ

こんな風に僕の事を叱ってくれる人をずっと

僕の間違いを命懸けで正してくれる人を心から待ってたんだ

なんてうれしいんだろう！

お陰で目が覚めた！

これで改心したぞ！

君には本当に感謝するよ

だからこの痛みの恨みは、日之影君に迷惑をかけないように、君
とは何も関係のないその辺の誰かに何かして晴らすとするよ』」

「っ！？」

このセリフ：

知ってるとはいえ、読むのと実際に聞くのとはやっぱり違うか

「（おいおい黒神

「ここまで」とは流石に聞いてないぜ……？）」

馬鹿だな球磨川

お前は俺に殴られた恨みを覚えておく事が出来ない」

「『うん、どうやらそうみたいだな

正直に言えばもう既に忘れかけてるくらいだよ

…そうだね、近い

「全てをなかったことにする」という点において君の異常と僕の過^{マイナス}負荷はちよっぴり近いよ

でも僕の大嘘^{オールフイクション}憑きは君のと違って取り返しがつかない』」

そう言って球磨川は螺子を取り出す

「(なんだ…?)

殴りつけた傷や破れた服が、いつの間にか戻ってるだと…?)」

「…にしても日之影先輩もアレですよー

ただ強いだけでどうにかなるんだったら生徒会長もあなたに頼って来ませんよ

それを断って自分一人で来るなんて…

あ、それ勇敢なんて言いませんよ？ 無謀です無謀」

そう言って俺は写輪眼を発動する

…まあ能力は使わない

要はノリだ

「(くっ！

なんだ！？ この場全てが螺子曲がっていくようなこの感覚

それに氷剣からはまるで全てを見透かされているような視線…

これは確かに異常どころじゃねえ！

まずい！ 何をされるか分からないが何かをされる！

なら、何かをされる前に！)

うおおお！」

グシャツ

「!？」

今の光景は志布志が左腕、蝶ヶ崎が右腕を折り、俺が頭を押さえつけている光景だ

……うん、あれは本能的にヤバいと思ったからなー、ついやつちまった

「…転校初日にいきなり本気を出すとか勘弁して下さい、球磨川先輩
あなた、本気で世界を滅ぼすつもりですか？

いやそのつもりなんでしょうけれど」

「肉弾バトルは全部アタシにくれる約束だろうが
あっさり忘れてんじゃねーよ大将、クロスゾ？」

「あんまりやり過ぎると俺らも危ないんでな」

「『ありがとう3人共！

危うくすべてをおじゃんにしちゃうところだったよ！』」

「……過負荷にもチームワークとかあったのかよ」

「『当然あるとも！

なんたって僕たちはジャンプの愛読者なんだぞ！
ぬるい友情・無駄な努力・むなしい勝利

それが僕達一（マイナス）十三組のモットーだよ』」

…それ少年ジャンプだと禁句三連発じゃないのか？

「『さて日之影君

四対一になったけど、続ける？』」

「くっ！

おおおおおおお！！」

日之影は複数の机を投げつけて来る

「無駄だ」

俺は砂鉄で盾をつくり机を全て防ぐ
だが

「逃げちまったみてーだぜ？」

「どうやら氷剣君が防いでいる一瞬でしようね」

「じゃあ行くわ」

「おい、何処にだよ」

「日之影先輩が居るところ
場所は既に把握してる
今も猛スピードで移動中だ」

「『ねえ、氷剣君って超能力者？』」

まあ超能力も使えるから間違いではないが
そうだな…

「冥土帰りのただの過^{マイナス}負荷さ
それ以上でもそれ以下でもない
じゃあな」

タタタタタタタタ

「……球磨川さん
アイツいったい何なんだ？」

「『僕の大切な友達だよ？
それ以上でもそれ以下でもない』」

「でもよー、世の中に入るんだな
球磨川さん以外ないかと思ってたけど
いや、球磨川さんは違うか」

「ええ、私も驚きました
氷剣君を始めて見た時、生まれて初めてでしたよ、こんな感情は」

「ああ、本能レベルで思ったぜ」

「『こいつ（彼）には勝てない
絶対に敵に回してはいけない存在（ってな）』」

「『うん、君達の評価は正しい
だって僕も彼の前では無力だったからね
氷剣君が本気になったらどうなるのかな、楽しみだな』」

知らぬ内にとんでもない過^{マイナス}負荷の二人（三人？）からとんでもない

評価を受けていた氷剣だった…

「「「やります!!」「」」」

今はめだか達が凶化合宿を決断したところ
いやー喜界島のあのビンタは凄かったね
友達思いだねー、あの子は
さて、このまま帰っちゃってもいいんだけど、どうせならここでち
よっと驚かせたいじゃない?
と言う訳で

「ワッ!」

「「「「「「「!!?」」」」」」」」

「ビックリした?」

「貴様!」

「おっと、そんなに敵意剥き出しにしないで下さいよ
あなたがいつか言ったように、一応俺も箱庭学園の誇るべき生徒
なんですからね、全く…

おお怖い怖い」

「貴様、よくもそんな事を抜け抜けと!!」

「待て、黒神」

「しかし!」

「さて、ここで挑発にのっちまったら、アイツの思う壺だぞ」

「くっ！」

「…氷剣、何でここにいる

わざわざ敵の陣地のど真ん中に出てくるなんて、馬鹿か漫画の主人公がする事だ」

「あははははは！！」

確かに馬鹿か主人公位しかこんな事しないですよー！

……でも残念無念又来年ってねー

俺はそのどっちでもないんだよねー」

そう、俺は馬鹿でも主人公でもない

俺は

「俺は最初っからチートな反則級キャラなんだよねー」

「ふざけないで！

あなたはそれでどれだけの人を傷つけてきたの？

それでなんとも思わないの！？」

なんとも思わないのって言われてもなー

「だって実質的に人傷つけたのって人吉と会長ぐらいしかいねーし」

そう言えば俺、能力使っての勝負っていたことないな

「嘘！？」

「本当だっつの

嘘だと思っんなら調べてみたら？

どーせ何にも出て来ないだろーけどなあ

と言うわけで、どーしますかあ？

今俺をとっ捕まえますか？」

「なあ氷剣、お前の目的は何だ？」

今まで黙っていた人吉が口を開いた

「目的、か

うーん、こうして聞かれるとなー

強いて言うなら、楽しむ事かな」

「楽しむ？」

「ああ、この世界に起こる全ての出来事を楽しむ事かな

人生は楽しまなきゃ損だろ

俺は今この学園で起きてる事が楽しくてしょうがないね！

まあこの学園に来て楽しくないなんて思った事は無いけど」

だって折角漫画の世界に来てるんだ

楽しまない訳無いだろ

「黒神めだかが生徒会長に就任した事も、生徒会が風紀委員会とやり合った時も、フラスコ計画潰すために奮闘してた事も、今こうして俺達負け組のー（マイナス）十三組を食い止めるために凶化合宿なんてしようとしてる事も！

全て俺にとっては面白い人生の一つだけだなあ！」

五人を守りながら戦うのは辛いでしょうに
あんた自身だって、体の至る所が痛んでるんじゃないんですか？」

俺は密かに日之影先輩に対して永遠エターナルの痛みを発動している
そろそろ無理をしたガタが来るはずだ

「…悪いな黒神

どうやら俺は足手纏いみてーだ」

そう言って膝をつく日之影先輩

「!? 日之影前会長!？」

「そういう事らしいですよ？」

庇う人間が一人増えちゃいましたね」

「貴様! 何をした!」

俺の過負荷マイナス、もう教えちゃってもいいか

「俺の過負荷マイナスを使っただけですよ」

「やはり過負荷マイナスを…」

「ええ、俺の過負荷マイナスは永遠エターナルの痛み
ただただ相手に痛みを与えるだけの過負荷マイナスです
……それでもやりますか？」

「くっ! 貴様!」

どうやらめだかでもこの状況はヤバいと思っているようだ
まあそれもそうだろう

プルルルルルルルル

「ん？ ああ、ちょっと待って下さいね
…はいもしもし？」

「『氷剣君？

今不知火ちゃんがとっても酷い案を提案してくれたから帰ってき
てね

早く君にも教えてあげたいから』」

ああ、ウルトラCか

まあここでバトってもどうしようもないしなく
ここは退くか

「よかったですね

どうやら俺は戻らなきゃならないようなん
でじゃ、失礼しますね」

「おい、待て！」

そしてめだかが殴りかかるが俺は軽くそれを避ける

「それじゃーまた近いうちに」

そして俺は教室へ帰った

そして教室

「で、どんな案なんだ？」

「『うん、それじゃ不知火ちゃん
説明よろしく』」

「りょうかい

あたし達の目的は、^{アフノーマル}異常を全員殺すことでしょ？
だったら一か所に集めて一網打尽にしちやえばいいんだよ」

「だがあいつらが一か所に集まるなんて有り得ないと思うけどな」
思うじゃ無くて絶対ないだろう

「そう、だから箱庭学園の校則、生徒総会の強制招集権
これなら十三組の奴らも参加しなきゃいけない
そこを叩けばいいのよ」

「けどそれは生徒会長でなきゃ使えない権力じゃないのか？」

「そ、それであたし達一十三組が生徒会を立ち上げて、今の生徒会
にリコールすればいいーんだよ」

「リコール、か

まあ確かに今の生徒会は副会長が居ない
リコールする理由は十分だな」

それなら大丈夫だろうが…

「てことはリコールするのは明日の全校集会ってことになるな」

そして生徒会戦争が始まるのか
でも…

「俺暇じゃね？」

だってこっちは球磨川、不知火、志布志、蝶ヶ崎先輩、江迎でも
う五人いるからもう生徒会の役職は全員分埋まっちゃってるだろ？」

これじゃあ介入しようがねえ

「何言ってるんの氷剣？」

あんたも生徒会の一員だよ？」

「いやだから役職無いだろ」

「知らないの？」

副会長って二人までOKなんだよ？」

は？

「マジで？」

初耳なんですけど」

「まああんまり副会長が二人になった事無いしね
知らないのも当たり前か」

「へえ

てことは俺も生徒会の一員か」

まさかこんな裏設定があるとは思わなかった
お陰で介入しやすくなった訳だが

生徒会戦拳、開幕！（前書き）

今回は短めです

最近最初の頃のテンションが戻って来たところですが、これからも更新頑張ります

生徒会戦争、開幕！

そして全校集会

「それではこれより、一学期終了式を
開始ふあいひふる」

「「「「「！？」」「」「」「」

「『みんな初めまして！僕は球磨川禊！
めだかちゃんの元彼でーっす！！』」

「「「「「ザワ……ザワ……ザワ……」」「」「」「」

っておい

「んな訳…

あるかああああ！！！！！」

スパアアアン！！↑俺が球磨川をハリセンで叩いた音

「『あいたっ！

何をするんだ氷剣君！』」

「こっちのセリフだ！

何やってんだお前は！」

「『いやだな、軽い冗談だよ冗談

アメリカンジョークだよ」

いやどう考えたっておかしいだろ

お前が言うとはブラックジョークにしかなんねーよ

何だよ元カレって

どう考えても嘘だろ

「あ、皆さん嘘ですからね嘘

あの完璧超人に元カレなんかいる訳ないでしょ
それに球磨川、そんなことより本題に入れよ」

「『うんそうだね

でまあ今日の本題なんだけど…

生徒会長黒神めだか、君に解任^{リコール}請求を宣言する』」

「「「「「!?!?!?!」」」」」

「生徒会の副会長、これは明らかに生徒会を運営していくにして重大な役職です

なのに現生徒会は副会長が不在、これは解任^{リコール}宣言する理由としては十分

まあ会長が凄過ぎて皆さん気付いていなかったでしょうけど」

正に不意を突かれたって感じの顔をしてる現生徒会の皆さん

まあ今まで気にして無かったもんなあ

「だが解任^{リコール}宣言は全生徒の過半数に達していなければ成立しないはずだが?」

そう来たか

だがその反論も想定済み

「はい、なのでこれが全生徒の過半数の署名です」

そういつて署名書を見せる

ただし……

「なっ!？」

これは、署名者が全員一十三組生ではないか!

そう、これに署名してある生徒は全て一十三組だ

無論3クラス分で全生徒の過半数に届く訳が無いので水増ししてある
学園長公認でな

「こんな数合わせの署名書……!」

「『おいおい、名ばかりだろうと人数合わせだろうと、この箱庭学園の誇るべき生徒だぜ?」

差別するなよ』」

「……っ!」

こうも言われては何も言い返せないようだ

「『さあめだかちゃん、君のその似合わない腕章を、自分で外して、僕に渡すんだ

そして僕達が、新生徒会になる』」

そう言って一十三組が集結する

「『あ、そうだ

この際だから新生徒会のマニフェストを発表しなきゃ
授業及び部活動の廃止

直立二足歩行の禁止

生徒間における会話の防止

衣服着用への厳罰化

手及び食器等を用いる飲食の取締り

不純異性交遊の努力義務化

奉仕活動の無理強い

永久留年制度の試験的導入』」

はつきり言ってこの世全ての常識人に喧嘩売ってるマニフェスト
よく言ったな球磨川

「あなた、こんなこととして何が目的なの!？」

「『ん? 目的?」

あーちよつと待って、今日中に考えてメールするから』」

「行き当たりばったりだなお前、まあお前らしいけど」

「(球磨川の目的、この人は本当にとんでもない方法でエリートを
殺しにかかってくるだろう

となると...)」

遅いなー、もう答え言っちゃまうか

「いやー、大変だなー

十三組を強制的に登校させないといけないからなー」

「!そうか!

めだかさん! 奴らの目的は箱庭学園校則第十七条です!」

「~~~~~!! 生徒総会の強制招集権か!!」

「その通り、生徒総会は十三組も登校しないといけませんからねー
都合がいいんですよ

さあ、どうしますか? 生徒会長さん?」

そして悩んだ末、答えを導き出したためだかは口を開く

「……黒箱塾塾則、159項」

「なるほど、現生徒会とリコールした側との決闘ですか:

庶務、書記、会計、副会長、会長の順に1対1、2対2の決闘を
行い勝った方が生徒会となる」

けど、生徒会には副会長がない

原作では日之影が代理をやっていたが、俺という例外マイナスがある
はてさてどうなる事やら……

「そう、生徒会選挙ならぬ、生徒会戦拳だ!!」

そして、生徒会戦拳の開戦が現生徒会長によって宣言された

生徒会戦拳、開幕！（後書き）

もうすぐテストの結果が返ってくる（涙）
順位が上がっていてくれと祈るばかりです

マイナス十三組、リーダー決定（前書き）

この調子でガンガン投稿頑張ります！

マイナス十三組、リーダー決定

さて、集会后

「『それにしても氷剣君って凄いね、そんな機械持ってるなんて
てゆうーか相手の行動監視するなんて反則じゃない？』」

俺は一十三組の教室でパソコンで高性能カメラ&最高音質の盗聴器
を搭載した昆虫型機械（蟻型三体）を操作し、生徒会の行動を監視
している

「残念ながら相手の行動を監視してはいけないなんて決まりはない
からな

使える手は全て使う、例えばそれがどんなに卑怯、卑劣、下賤な事
だと言われようとな」

「善吉、どこに行っていたのだ？」

「悩んでたってどうしようもねえからな、考える前に行動だろ？
見てみるよ、俺達を支持し、信じてくれる箱庭学園の生徒の声だ」

「『へえ、めだかちゃん達は箱庭学園の生徒からかなり応援を受け
てるみたいだね』」

「ああ、なにしろ支持率98%だからな
残りの2%も着々と支持を得て来てる
もうすぐ支持率99・9%くらいにはなるんじゃないか？」

「『残りの0・1%は?』」

残り0・1%?

そんなの決まってるんだろ

「俺達だよ」

そう、俺達がいる限り100%になる事は無い
まあそんな事は置いといて

「どうやら生徒会は庶務戦は人吉で行くみたいだな
で? こっちはどうする?

まあ俺の中ではもう決まってるんだけどな」

というか原作でもう決まってたし

「『え? 誰が行くの?』」

「ああ...それは....

.....お前だ!」

そう言って俺は球磨川を指差す

「『僕?』」

「そう!

プラス

幸福なあいっらはまさか初戦からうちのリーダー的存在であるお
前を出すとは思ってもいないだろ

マイナス

俺たちは社会不適合者なんだ

なら初戦から派手にかましてメチャクチャにしてやろーぜ!」

と、マイナスらしいことをそれらしく言ってみる
すると全員が静まり返ってしまった
なんかミスったか？
俺が焦り始めると：

「よく言った氷剣！

やっぱお前は最低なマイナスだ！」

「ええ、素晴らしい考えだと思います」

「『凄い氷剣君！

僕感動しちゃったよ！

そこでみんなに提案するんだけど、氷剣君を僕達のリーダーにするのはどうかな？』」

「おお！いいんじゃないか！？」

「私も賛成です」

「私も」

ここにいる全員が賛成した
俺がリーダーか：

まあ基本原作沿いだけどいいか

「じゃあこれからよろしく頼む」

「ああ

よろしく頼むぜ、大将」

「おう！」

つーわけて球磨川
初戦は頼むぜ？」

「うん、任せて！」

生徒会が残り四戦を全て棄権したくなるくらい悲惨な光景を見せてあげるよ！」

マイナス十三組、リーダー決定（後書き）

それではまた次回！

生徒会戦拳、庶務戦 序（前書き）

この調子で頑張ります

生徒会戦争、庶務戦 序

そして当日

俺と球磨川はマイナス十三組の教室に集合し、生徒会戦争受付会場に向かった

会場に着くと俺達の方が早く来たようでまだめだか達は来ていなかった

「『まだめだかちゃん達は来てないみたいだね
ま、気長に待つか』」

そう言っただけで球磨川はジャンプを読み始める

……どっから出したんだ、その分厚いジャンプを
まあそこはギャグ補正ってことか

そして暫くして

カチャ

現生徒会メンバーが入って来た

「『あ、遅かったねめだかちゃん

駄目だよ、プリントには時間厳守って書いてあったじゃない』」

「球磨川、まさか貴様一人か？」

「酷いですね、生徒会長
俺もいるのに」

「「「「!?!?!?!」」」」」

俺の存在に気付いて生徒会メンバーは驚いていた
突然自分の後ろに敵が現れりや驚くか

まあ本当は現れたんじゃないやなくてめだか達の後ろにいた状態で知られ
ミスタ
ーアンノウンざる英雄を解除しただけなんだけどな

「『僕達二人だけなんだ』

他の過負荷マイナスはみんな海水浴とかで夏休みを満喫してるよ

あー！人吉先生見ーつけ！』」

そう言っって球磨川は人吉先生の手をとる

俺はそこら辺にあった椅子に座り座標移動でどこかの自販機の中か
ムーブポイントらコーラを自分の前に移動させ、寛ぐ

「『この前江迎ちゃんとエロ本を買いに行った時、凄く人吉先生に
そっくりな女の子が載っている一品を見つけましてね

今度お持ちしますからどれほど似てるのかご自分の目で確かめて
みてください』」

「…………えーと、うん、今度ね…」

人吉先生、ひき気味

まあ普通そんなこと言わないからな

「おい待て球磨川、こっちを向け」

グイッ

めだかが球磨川を強引に向かせる

「貴様と氷剣、どっちが庶務戦に出るのだ？」

「『僕だよ

僕ら過負荷マイナスの新リーダーの意見で決まったんだ』」

「新リーダーだと？」

「はいはい、新しくマイナス十三組のリーダーになった氷剣刀哉です」

「『わゝ（パフパフ）』」

「氷剣が新リーダー！？」

俺がリーダーってそんなに意外か？

たまには俺だってリーダーシップ取るぞ

「『まあそう言う訳だから今日はよろしくね善吉ちゃん
正々堂々フェアに戦おう！』」

ガシッ

めだかが球磨川の胸ぐらを掴む

「『？

どうしたの？めだかちゃん』」

「球磨川！

貴様という奴は……どうしてそうなのだ!!」

「『なんで怒ってるの?」

僕と直接戦えなくなったから?

それとも善吉ちゃんがピンチだから?』」

「今回の事も含めて、貴様の全てが腹立たしい!」

「『え』」

今回の事の文句は氷剣君に言ってよ

決めたのは彼なんだからさ』」

「ふざけるな!

私には貴様の考えている事がさっぱり分からん!

十三組の抹殺!? エリートの皆殺し!?

何故お前はそんな事を企む!?

エリートと呼ばれようと、アブノーマルと呼ばれようと、彼らは

私達と何も変わらぬ人間なのだぞ!? 喜んだり悲しんだりする人間
なのだぞ!?

おいそれと傷つけていいものではない!

どうしてそんな事が分からだ!?」

あゝこりゃ相当怒ってんな

そろそろ仲介入るか

「はいはいはい生徒会長

そこらへんにしたらどうですか?

そろそろ時間ですよ」

「うるさい! 貴様もだ!

何故分からのだ!？」

……ちーつとムカツと来たかも
ならこちらも…

「じゃあ言わせてもらう

そんなことも分かってねー奴らが大勢いるから世の中から犯罪が
消えねーんだよ

もし全人類がそんな優しい心の持ち主だったらこの世界はとっく
に争いがなくなって全てが幸せになってるね

はつきり言ってこの世界は強者が弱者の上に立って成り立ってん
だよ

黒神めだか、お前もその強者の一人だ

いいか? この世にある利益は元を辿れば全部貧しい奴らからしぼ
りとったモンなんだよ

その搾り取ったモンを使って裕福な暮らしをしてんだよ!

だからこの世界の構造が変わる事は絶対でない!

強者が強者である限り、弱者は弱者であり続ける、一生な!」

「『そういうこと

過負荷のこと分らないくせに分かってもらおうとするなよ、め
だかちゃん』」

「~~~~~!？」

「『あ、そうだ

例えばの話だけどさあ

人生はプラスマイナスゼロだって言う奴いるじゃん?

エリートでも喜んだり悲しんだりするとか、幸福な人もそれ相応
の大変な

苦勞を積み重ねているとか

まあおよそんな意味で、だから人間はみんな平等って言いたいんだと思うけど

でも、人生はプラスマイナスゼロだって言う奴は

決まってプラスの奴なんだ

幸せな奴だからそんな悟ったみたいな常套句が言えるんだよ

少なくとも過負荷は、プラスが^{マイナス}あったからってマイナスが帳消しだなんて思わない

なんのことはない

僕は幸せでプラスな皆に、マイナスの気持ちを分かってほしいだけなのかもしれないね』」

めだかがかなり言葉に表せないような表情をしている

……いや別に醜い顔ってことじゃない

後悔、苦悩、憤慨

それらが混じり合ったような顔をしているのだ

「……………!!」

どうせそれも嘘なのだろう!?

すがりつきたくなるような嘘だ!!」

めだかはそれを受け入れない、いや受け入れられないでいる
だから嘘だと決めつけ、それをあえて頭の中に留まらないようにしている

「『うん、きつとそうだね』」

球磨川も嘘だと否定されたことを否定せずにそれを認める

「『とにかく、僕はめだかちゃんとは戦わない

僕はめだかちゃんが大好きだからね

だから会長戦の君の相手は他の過負荷マイナスが務めるよ

だからめだかちゃんは僕が善吉ちゃんを嫌と言うほど螺子伏せる
場面を間近でゆっくり見ればいい』」

「っ！球磨川！！

だから貴様は……！！！！」

そしてめだかはとうとう我慢できなくなったのか、球磨川に向かって走り：

「それでは定刻になりましたので始めさせていただきますたく存じます」

長者原融通に止められた

「まずは皆様、本日はご多忙の中こうしてお集まりいただきありがとうございます
とうございます

私目は僧越ながら生徒会戦拳を管理させていただきます

選挙管理委員会副委員長二年十三組、長者原融通と申す者にございます

ほんのひと夏の間ではございますが、どちら様もよろしく願い
いたします

ですが、何分この通り緊張しております

不満や至らぬ所があれば遠慮なく仰ってください」

「『んゝ、不満ねえ

いきなりそんなこと言われてもなあ』」

次の瞬間

キンッ

球磨川が長者原先輩の首に螺子を刺そうとしたのを長者原先輩が人差し指と中指の二本で止めていた
すげー

「…これは一体どういった趣向でございますか？
球磨川様」

「『いや、君にこの戦拳を管理する資格があるかどうか試しただけさ
そして不満なく合格だよ、よろしくね長者原君』」

「おいおい球磨川
俺に後ろを取られてる時点で合格って言えるのか？」

俺は後ろから長者原先輩の首に砂鉄の剣を突き付けている

「ちなみにこれ、人の体くらいなら簡単に切れますんで
次からは簡単に後ろ取られないようにして下さいね」

「……かしこまりました
今後、注意致しましょう」

「お前ら、アップノーマル「平等」の異常を持つ長者原君がジャッジするんなら、
学園側の裏工作の可能性もないが

逆に俺達が負けた場合、リカバリーもきかねーぜ？」

「ああ、私達が公式上のルールで負けた場合、長者原二年生は躊躇
無く連中を生徒会に選出するであろうな」

そう言う事、俺達マイナスが何をしようと、それが公式上のルールに則っていれば長者原先輩は何も言ってこない
つまり、公式に従っていれば後は何してもいいってことだ

「…大丈夫だよめだかちゃん
要は勝てばいいんだろ？」

俺は、球磨川の方が勝ちやすい

不知火や江迎を相手にするよりよっぽど気が楽だぜ
だからめだかちゃんはいつものに体に無駄に偉そうに、どっしり悠然と構えていてくれ

それに球磨川、お前が何をほざこうと俺は興味がねえ

お前がどうしてこんなことするのかなんてしらねーし、お前がどうしてそんな人間マイナスなのかなんて知りたくもねえ

お前こそ分かってもらおうとしてんじゃねえぞ、図々しい
お前は意味不明なキャラのまま負けてこの箱庭学園から出ていくのさ

だからその前に、お前に一つだけ言っておいてやる
人生は、プラスだ」

言ってくれるねえ

まあ俺も人の事言えないんだけどさ
人生がプラス、間違っちゃいない

「それでは、対戦方法の選択に移らせていただきます
この13枚のカードの中から選んでいただき、その選んだ形式で闘っていただきます」

そして十二支の名前が書かれたカードと「人」と書かれたカードが運ばれてきた

「では挑戦者である球磨川様、この中から好きなカードをお選び下さい」
チャレンジャー

「『うーん、どうしよっかな』
やっぱりここは過負荷マイナスらしく巳で』」

そういつて球磨川は巳のカードを選ぶ

「ふむ、流石は球磨川様

この後の試合の景気付けとも言える初戦に巳のカードをお選びになるとは

庶務戦の形式は「毒蛇の巣窟」に決定致しました

これは我々が用意した庶務戦の十三の対戦形式の中で、最も残酷なルールで行われる選挙でございます」

そして庶務戦は一週間後、校庭で行われることとなった

生徒会戦拳、庶務戦 序（後書き）

もう卒業シーズンですね

卒業生が涙する姿は見られるのかな

生徒会戦拳、庶務戦 破（前書き）

連続投稿です！

地震凄かったですね

被災地の皆さん、めげずに元気を出して一生懸命生きてください

生徒会戦拳、庶務戦 破

一週間後

「今日が初戦だな」

「ああ

さて、あたし達は行くかな」

そう言って志布志、蝶ヶ崎先輩、江迎が教室を出る
初戦と同時進行で凶化合宿もめちゃくちゃにして来るそうだ

「『うん、頑張ってね
健闘を祈るよ』」

「そっちこそな」

そして俺と球磨川も教室を後にし、校庭へ向かった
そこには大量のハブが入った縦横深さ100メートルの穴があった

「おい長者原二年生
まさかこの中で戦うのではあるまいな？」

もしそうなら冗談じゃねえよ

「確かこの舞台はこの穴ですが、まだ未完成でございまして
……おや、どうやら最後の部品が運ばれてきたようです」

そして四本のポールに金網がの床がはめられる

「決戦舞台、『毒蛇の巣窟』

これにて完成にございます

勝敗は球磨川様が人吉様の生徒会の腕章を取るか、人吉様が球磨川様に「まいった」と言わせるかです

制限時間無制限、いかなる手段を用いても構いません

ただし、この金網が底に着いた時点で両者失格ですのでお気を付け下さい

それでは両者、金網の上へ」

そして球磨川と人吉が金網の上へと向かう
向かっている途中、人吉の動きが止まった
恐らく球磨川にわざと負けてあげようかと言われたんだろう

「それでは生徒会戦拳、庶務戦……
開始！」

試合が始まった途端、人吉は目を瞑った
黒神くじらに言われた対マイナス戦法

「『目を閉じたくらいで僕の過負荷マイナスを封じた気になるなんて、それこそ現実から目を背けているとしか思えないよ善吉ちゃん

だっておぞましき僕の過負荷すがたが見えなくっても、おぞましき僕の過負荷ボイスは聞こえるだろう？」

ドンッ！

「ああ、確かにお前の声はよく聞こえるぜ
だがな、そのお前の声も俺にとっては攻撃の情報源なんだよ！」

そこから人吉は球磨川に一方的なラッシュを浴びせる
さて、ここらで生徒会メンバーにコメントを戴きますかね

「やーやーどーもどーも、生徒会の皆さん」

俺が現れた瞬間、生徒会メンバーが全員身構えた

「ちょっとちょっと？」

別に何もありませんって

今回はあくまでも人吉と球磨川の勝負ですから
それに手え出したら長者原先輩に何言われるか分かんねーし」

「あなた、そんな言葉が信用できるとでも思ってるの？」

思ってるの？と言われたら…

「まあ出来ませんよねえ」

今まで生徒会に敵対して、今も敵対してる奴の言葉を信じろって言
われても信じられる訳ねえよな
まあ今はそんなことはどうでもいい

「庶務戦が始まって人吉が猛ラッシュしてっけど、人吉は球磨川に
勝てると思いますかね？」

「当たり前だ

人吉は絶対に勝つ

この私が勝つと信じているのだ」なるほど、絶対なる信頼、か…
羨ましいねえ

球磨川は黙っての攻撃にでるが：

「見えなかりうが聞こえなかりうが お前の気持ち悪さは肌で感じるぜ……」

ダダダダダッ！

「『イタタタタ……』

まったくもう

これは週間少年ジャンプだったら、規制されかねないじめの描写だよ』」

球磨川が涙目で言う

そして次の瞬間、球磨川の外見が^{オールフイクション}大嘘憑きによって全て元に戻っていた

戦闘がまた始まるが、これでは埒が明かない
そろそろか……？

「おい球磨川

今のお前じゃどーやっても俺には勝てねえよ
早くギブアップしたらどうだ？」

人吉は球磨川に降参をするように言う
それに対して球磨川は……

「『うん、いいよ

強くなったね人吉ちゃん』」

あっさりと負けを認めた

「『いつまでもか弱い後輩だと思っていたけど、いつの間にか僕を越えていたんだね

なんだろう…、不思議と全然悔しくないや…

ほっとしたよ

君はもう、僕がいなくなっても大丈夫だ、と言っても信じてはもらえないかな？

君達には、特に善吉ちゃんには随分辛く当たってきたからね
だけど、どうやらその甲斐はあったみたいだ

君達のために、心ならずも悪役を演じてきたけれど、これならもう真実を隠す必要はないね

今こそ語るよ…

僕がこの学園に来なければならなかった理由を！』」

おお！

ここで言うのか！？

「おいおい球磨川！

こんなところで言っちゃまっていいのかよ！？

お前は…！」

「『いいんだ氷剣君！

これでいいんだ

もう隠す必要はないんだよ』」

球磨川…

「そうか…

お前が決めたんなら、俺は何も言わねえよ」

ここで球磨川が箱庭学園（こてい）に来た本当の理由が明らかに！

「!？」

来なければならなかった理由!？」

「どういふことだ!球磨川!」

そして、球磨川が箱庭学園に来なければならなかった理由とは…!

次回を、刮目して見よ!!

生徒会戦拳、庶務戦 破（後書き）

自分も頑張ります

生徒会戦拳、庶務戦 急（前書き）

連続投こオオオオオオ！！

生徒会戦争、庶務戦 急

今回いよいよ、球磨川が箱庭学園に来なければならなかった理由が明らかに！

「『僕が箱庭学園に来なければならなかった理由、それは…』」

球磨川が話し始めた瞬間…

「『ほら…』」

グサツ！

「『親が高校くらい出とけって言うからさあ』」

ククッ

駄目だ…

笑いが堪えられねえ…

「アッハハハハ！」

見事に期待してやんの！

アハハハハハハ！」

普通に考えて、球磨川がそんな重大な事を言う素振りを見せた時は
たいていしょうもない事言うに決まってるだろ
過負荷はまともじゃねーんだからよ
おれたち

「『相手が降参したくらいで油断しないでちょうだい
こともあるかこの僕とスポーツでもしてるつもりだったのかい

「?」

めだかは仇を見るような眼で球磨川を睨む
いやまあ実際に仇みたいなものなんだろーうんだけどさ

「球磨川………!」

「『いいねその顔

やっぱり善吉ちゃんは目が綺麗だ

だからここから先は、僕と善吉ちゃんの個人的な喧嘩だよ』」

成程な

ルールの中で善吉をポッコボコにするんじゃないくて、試合と関係無い所でポッコボコにするってことか

それなら確かに選管も手出し出来ねえな

圧倒的に中立であるが故に、個人的な喧嘩には介入できない
どちらかの味方をすれば、中立じゃなくなっちまうからな

「善吉!」

めだかが人吉の所に行こうとする
まあそんなこと俺が許さない訳で

ズシャッ

エァロシユーター
風力使いで真空刃を生み出し、めだかの足元の地面を抉る

「!?!」

「まあそう慌てないでくださいよ

こっからが面白いところなんですから？

それに、今会長が行った所で、あの中で助かるのは動物避けを持った会長だけで、人吉は助かりませんよ？」

「くっ！」

そうこうしている内に金網はどんどん下に落ちていく

球磨川と人吉は何か話しているがかなり離れているためよく聞こえない

「『君は勝って格好良く死ねばいい

僕は負けてみっともなく生きるからさ』」

その言葉と同時に、負っていた傷がなくなる球磨川

「ちっ、また出やがった

球磨川の治癒能力」

おっと

それは違うな

「バカな事言わないで下さいよ、黒神先輩

それじゃあただの異常アフノーマルと同じじゃないですか」

「『そうそう

治癒能力のように前向きの能力が僕のような負ねじれ完全から生まれるわけがないだろう？

僕はただ、善吉ちゃんのがんばりを

僕が彼に蹴られまくったという現実を

「なかったことにした」だけさ』」

「そう、現実を虚構にする
すべて なかったこと
それが球磨川の大嘘憑きだ」
オールフイクション

そして人吉の挙動がおかしくなった
つーことは、「なかったことにした」か
人吉の視力を

「『善吉ちゃんは過負荷ぼくのことなんか見たくもないみたいだから、ずっと見なくても済むようにしてあげたんだ
つまり君の視力を、「なかったことにした」
だけど安心して善吉ちゃん
それでもきつと、地獄は見られると思うから』」

「っ!？」

球磨川! 貴様ア!

めだかがまたもステージに行こうとするが

ズシャッ

またも真空刃で足元の地面を抉る

「だから動かないで下さいっての
どうせ行っても無駄なんだから」

さて人吉の心境は、と
サイコメトリー
俺は読心能力で人吉の心を読む

「(はあ? 俺の視力を「なかったことにした」だって?)

それがどうした 馬鹿馬鹿しい！

「すべてをなかったことにする」マイナス 過負荷、大嘘憑き！

なるほど大したスキルだが、今更驚きもしねえよ！

てめえみたいな負完全にお似合いのスキルってだけじゃねーか

元々俺は目を閉じたまままで戦うつもりだったんだ！

視力を「なかったこと」にされたところで痛くもかゆくもねえよ！

むしろ目を瞑るまでもなくお前の不気味な姿が見えなくなって丁

度いいぜ！

ありがとうございますと礼を言いたいくらいだ！

さあ、続けるぞ球磨川！

なんなら俺はお前をなかったことにしてやるよ！」

うーん

威勢のいい事言ってるけどなあ

実際お前、めっちゃがくがく震えてんだぞ？

それに人吉、「視ない」と「視えない」は圧倒的に違う

「『ところで善吉ちゃん、ひとつ聞いてみたいんだけど

「目を閉じた方が強くなる」とか、そんなたわごとを本気で信じ
ていたのかな？

フィクション 漫画じゃないんだから、見えた方が強いに決まってるだろ？』」

「おいおい、オールフィクション 大嘘憑きなんて過負荷使ってるお前が言っても皮肉に
しか聞こえねーよ」

「『あれ？そう聞こえちゃうのかなあ
もしそうだとしたらごめんね』」

そこでくじらが

「おい人吉！」

ビビるこたあねえんだよ！

すべてをなかったことにするってのもハツタリに決まってる！

本当にそこまでのことができるんならそもそもこんな戦拳は成立しねえ！

むしろアンコントローラブルな能力と見た方がいいぜ！」

と激を送る

「おいおい黒神先輩よお

オールフイクション

確かに球磨川の大嘘憑きはアンコトローラブルだ

マイナス

アブノーマル

けどよお、過負荷を常識やただの異常の一般評価で測んない方がいいぜ？

世の中にはあり得ねーほどこいかれた人間が持つあり得ねーほどこい

アブノーマル

マイナス

かれた異常や過負荷が腐るほどある

オールフイクション

球磨川の大嘘憑きもその一つだってことだ」

オールパーフェクト

エターナルペイン

まあ俺の全知全能と永遠の痛みも人のこと言えねーけどな

「『善吉ちゃん

僕と友達になってくれるなら、その目を戻してあげてもいいよ』」

ここで球磨川はある提案をした

ははっ、正に大嘘憑きだな

オールフイクション

大嘘憑きで「なかったこと」を「なかったこと」にはできねーのに

人吉は色々と考えてるみたいだ

走馬灯ってやつか？

「俺はお前が嫌いだ

だからお前の友達にはなれない」

くうくう…

泣けるねえ

こんな絶望の淵に立たされても自分を曲げず、貫き通したとは主人公が成せる決意ってか？

いや、感動モノだねえ

「めだかちゃん！

楽しい高校生活だったなあ！

入学式！新入生代表の挨拶で、お前はいきなりぶちかましてくれたよなあ！

日之影先輩とも実は最初はモメてたしな！

そうそうたる先輩方を向こうに回しての生徒会選挙！

ありゃあ燃えたぜ、懐かしい！

目安箱を設置してからは休む暇もなかった！

一学期だけで百件以上は悩みを解決したか？

花の世話を全部俺に押しつけやがって！

阿久根先輩との柔道対決！喜界島との水泳対決！

敵だったあいづらが今じゃ一番頼れる仲間だ！

風紀委員会との抗争！時計台地下の視察！

忘れようもないほど大変だった！！

いろいろあったけど、今となっては全部いい思い出だ」

「何を言っておるのだ善吉…

やめろ、言うな…

そんな…今わの際みたいなことを言うなあっ！！」

「好きだぜ、めだかちゃん」

「っ！！」

善吉「イイイイイイ！！！！」

(涙)

ヤベエ

真面目に泣けるわこれ

うん、冗談抜きで涙が…

「マイナス無効化システムその13！

身体の震えが止まらないなら、もっと激しく震えるまでだ！」

そして人吉は震脚をする

その衝撃によって金網は底に向かって急降下する

もちろんハブは二人に絡みつく

オールフイクション

球磨川は大嘘憑きを使うために螺子を取り出すが

人吉に両腕を抑えられる

「球磨川

その欠点なら、俺がカバーしよう

友達にはなれないけど、せめて一緒に死んでやるよ

一緒に地獄を見に行こうぜ、球磨川先輩！」

「『……………嫌だよ

死にたくない、謝るから離して

僕が悪かった』」

「ははっ、お前の口からそんな言葉を聞くとはな
とてもじゃねえが……………信じられねえよ」

そして球磨川と人吉は、無数のハブに噛みつかれた

生徒会戦拳、庶務戦 急（後書き）

最近ツタヤを乱用中

生徒会戦争、庶務戦 終（前書き）

庶務戦終了です

最近地震が続く毎日ですが頑張ってます！

生徒会戦争、庶務戦 終

「A班は俺と共に球磨川様の解毒及び治療！B班は人吉様に回るんだ！」

自分の体を治すつもりでやれ！！

そしてC班からZ班は全員掛かりで彼女を止めろ！

いいか、絶対に離すんじゃないぞお！！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

善吉イイイイイイイイイイイイイイ！！！！」

この2セリフで分かると思うが

めだかがショックで暴れ、それを選管が大人数で抑えようとしてるところだ

と言っても、流石は黒神めだか

あれだけの選管を相手にしてもなお暴れるとは

つか個人的に選管の皆さんが可哀想というか何と言うか…

よし、一肌脱ぐか

と言う訳で、

「すごいパーンチ」

削板軍覇君のすごいパーンチを食らい、めだかは大きく吹っ飛ぶ

……ヤベツ、周りの選管巻き込んだしまった

ま、いいか

「落ち着けよ、生徒会長さん」

「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

うお、あれ食らってもまだ向かってくるか
ぶっ飛ばすのは止めて押さえつけでいくか

「落ち着けつつってんだろ！」

ガシィッ！

俺はめだかを上から押さえつける

っ、マジかよ

オフエンスアーマー
窒素装甲使っててギリとかヤバくね？

「放せ、放せエエ！」

「放したらどうなるか分かんねーだろうが！」

ムクッ

球磨川が突然起きあがった

「ッ！球磨川ア！」

「お、戻ったか

おい、これどうにかしろよ

疲れんだぞこれ」

「球磨川！よくも、よくも善吉を！」

これに対し球磨川は

「『よくも、とは心外だなあ

オールフイクション

僕は嘘憑きを使って助かろうとしたのに、それを善吉ちゃんが止めちゃったんだよ

まあ本当は手じゃなくてもいいんだけどね

ただ両手からやるのが一番見栄えがいいんだよ

ほら、ドラゴンボールの悟空だって足からかめはめ波撃ってるでしょ？

あれと同じだよ

それにめだちゃん、被害者は僕なんだよ』」

おいちよつと待て

つまり人吉が戻るまでずっとめだか抑えてろってのか？

さすがにキツイぞ…

そう思っている

ドゴン！

腹に重い衝撃がきた

つゝかめだかが手加減無しで殴りやがった

イッテエ…

こりゃかなり効くぜ

しかし俺も大人だ

これで殴り返すなんてことは…

ドゴン！

殴り返すなんてk…

ドゴン！

殴り返すなんも…

ドゴン！

「離せ！離せエエエエ！！」

殴り返s…

ドゴン！

……………

ああ、うん

最初の一発以降は更に衝撃拡散と空気風船で衝撃自体は無くしてっからぶっ飛ばねえんだけどさ、痛みまで消えねえんだよ

だからムチャクチャ痛えんだよな

だから人吉、早く起きろよ！！

そしたら俺の願いが通じたのか

「あれ？ここは…」

ヨッシャアアアアア！！

人吉起きたアアアアアアア！！

そして俺はすぐさまめだかを抑えるてを離す

「善吉！？善吉イイイイイイ！！」

案の定めだかは一直線に人吉のに飛び付き、抱き締める

…大丈夫か？あれ

体がめっちゃバキバキ鳴ってっけど…

まあいいよな

次は書記戦、か

今頃は日之影、阿久根、喜界島は血だらけだろうなあ
つーことは原作通り書記戦は黒神くじらが出るのか…
しばらく出番無いんだよなあ
どうしよう…

生徒会戦拳、庶務戦
引き分けにて終戦

生徒会戦争、庶務戦 終（後書き）

ありがとうございました
塾の講習会がキツい：

生徒会戦拳、書記戦 序（前書き）

今回は所謂繋ぎです

これからよろしくお願いします

生徒会戦争、書記戦 序

しかし、これはどういう状況ですかね

（回想）

ある日

プルルルルルルル

「ん？球磨川か…」

ピッ

「もしもし？」

「『もしもし氷剣君？

マイナス

実はね、今日黒神くじらをこつちに引き込もうと思うんだよね

それで、断られたら古賀ちゃんを使って脅すつもりなんだけどね

その古賀ちゃんを連れて来てほしいんだよ

場所は箱庭学園の第三理科室だから

それじゃ、頑張ってね』」

ピッ、プーップーップー

「……なんでさ」

いたよ古賀

何か普通に廊下歩いてるし

くじらは既にマイナス十三組の教室へ行ったのか

「おーっす、今日は古賀先輩に用があって来たんですよ」

「ッ！？氷剣！？」

あんた、何しに来たの！」

「なーに、一切危害を加えないと約束しますよ
少しいて来てくれませんかね？」

あなたはバカじゃない、自分の立場が分かってるはずですよ？」

「だ、誰があんたに…！」

結果、交渉は決裂つと

なら強行作戦入りまーす

「じゃ、力ずくで行きますね

ああ、別に恨んでくれて構いませんよ？」

テレキネシス
念動力で古賀の動きを止める

アブノーマル
いくら異常な駆動・回復力を持つとはいえ、分子レベルで周囲を固められちゃ動けねーだろ

テレポート
後は空間移動で第三理科室へ転移つと

シュン

「ケケッ、テメーだな？」

球磨川さんから話は聞いてるぜ？」

過負荷マイナスを持った知らない人……過負荷Aマイナスでいいや

「よろしく願います

古賀先輩を連れて来たんで」

「おう、ご苦労さん

じゃあお前は……

もう死んでいいぞ」

ドガッ

突然釘バットで頭殴られた
何故に？

「ギャッハハハハハハ！！」

簡単に死にやがった！

さーて、後はこいつをボコして終わりだ」

そして過負荷Aマイナスは古賀に近付く

「つたく、こんな雑魚が球磨川さんの秘密兵器かよ

弱えーにも程があるぜ」

カッチーン

決めた、この雑魚ぶっ殺す

「痛ってーなおい

少し下手にでてりゃ調子に乗りやがって、殺して解して並べて揃えて晒してやろうか？」

「まだ生きてやがったか
だからお前もういらねーつつってんだろ！」

そして釘バットを振りかぶる

「黙れよ、雑魚が」

次の瞬間、雑魚は白目を向いて倒れた
何をしたかって？

月詠使って精神世界に引きずり込んで、ラフラフラシア荒廃した腐花と永遠の痛み
で痛めつけて、大嘘憑きでそれを無かった事にして、エターナルペイン荒廃した腐花
と永遠の痛みで痛めつけての無限ループしたらこうなった

そしたら他に過負荷の人が襲いかかってきてんだよね
マイナス

いや一方通行の反射でダメージなんてないんだけどさ、アクセラレータこうも人口
密度高いと邪魔なんだよな

よし、纏めてぶっ飛ばすか

というわけで原子崩しで一気に蹴散らすことにした
メルトダウナー

ここで某超電磁砲の名台詞を弄ってみる
レールガン

「なあ、粒機波形高速砲ってしてるか？

擬似的な「壁」となった『曖昧なまま固定された電子』を強制的
に動かすことで、本来限りなくゼロに近い質量しか持たないはずの
電子を物体に接触しても減速することなく放たれた速度のまま対象
を貫く特殊な電子線と化し、高速で叩きつけることで絶大な破壊力
を生み出せるもんらしいんだけどよ

………こういうのを言うらしいぜ？」

全方位に発射ア！

ドオオオオオオオオン！！

うん、敵さんは綺麗さっぱりくたばってくれた
ああ、もちろん古賀に当たらないように調整したぞ？

お陰で今も健在

化物でも見るような眼で見られてるけどな
するとそこへめだか達がやって来た

「氷剣、これをやったのは貴様か？」

「ええ、そうですよ

球磨川に言われた通りここに連れてきたら突然釘バットで殴られ
ましてね

ちよつとやり返したら他の人たちも襲いかかってきちゃって
だから纏めてボコツたんですよ」

「では先程の轟音は貴様が起こしたもののか？」

「ええ、その通りです

詳細は古賀先輩にでも聞いて下さい

と言う訳で古賀先輩、これでおしまいですんで後はどうぞご自由
に」

プルルルルルルル

ん、球磨川からか

ピッ

「もしもし」

「『もしもし、氷剣君？

結局くじらちゃんの引き込みに失敗しちゃったんだよね』」

やっぱり引き抜けなかったか

まあここで引き抜かれちゃっても困るんだけどよ

「ああ、こっちも生徒会長相手に全滅だ

この作戦は完全に失敗だな」

「『そうだね

ああ、ちよつと待って今くじらちゃんにかわるから、めだかちゃんにかわってくれるかな？」

「ああ、分かった

生徒会長、今球磨川が黒神先輩とかわるそうなんで、かわっても
られますか」

「ああ、いいだろう

……お姉さま

古賀二年生は我々が保護しております

だから私の味方でいてください！

わかっていますよ、お姉さま

余計なお世話だと言うのでしょうか？

……ありがとうございます」

ピッ

「よかったですね、黒神先輩がこちらに引き抜かれなくて
俺はこれで失礼しますよ」

さっさと帰って寝よ
何かだるいし

「待て氷剣」

何故に呼びとめる
こっちは早く帰りたいのに

「…なんですか、生徒会長」

「なぜ古賀二年生を傷つけなかった？」

「はあ？」

何でって言われても
あのまま襲われてても困るし

「傷つける必要性が無かったからですかね
ここで古賀先輩を傷つけても俺には何のメリットもありませんし」

「そうか
だが何故球磨川に私相手に全滅と言った？」

「流石に自分で潰したなんて言えないですからねえ
まあそこは口裏合わせてくださいよ
元々反抗したら潰すつもりだったんでしょ？」

いや、何か後ろめたさが……
潰したことなく球磨川に秘密にする事だから、そこは悪しからず

さて、俺の役目も終わったし、帰るか

「それじゃ、書記戦の時にまた」

そう言って俺は帰った

生徒会戦拳、書記戦 序（後書き）

ありがとうございました

明日から学校だ〜！

と言う訳で、今よりも更新速度亀になるかもです
なるべく早く書きあげるため頑張ります

生徒会戦争、書記戦 破（前書き）

久しぶりでございます

生徒会戦争、書記戦 破

そして当日

一十三組の教室

志布志が結構御機嫌斜めなのか御機嫌良しなのか良く分からない様子で詰め寄って来た

「おい氷剣！」

今日の書記戦、アタシにやらせろ！」

まあ想定済みだ

ここで志布志以外にするつもりもないし、俺が出てもいいんだけどけどそれじゃあな

ってかくじらと志布志の雰囲気はかなり険悪なままになりそうだ

「まあそう急ぐなよ志布志

俺はもとよりお前を書記戦で出すつもりだったし、お前も黒神先輩と決着^{ケリ}つけたいだろ？」

俺がそう言っていると志布志は嬉しそうな表情をした

「流石！分かってんじゃねーか大将！」

「クックック、不幸と不幸ごっこの違いを、字に書いて教えてやれおっと、そろそろ時間だそれじゃ、行こうか？」

そして会場

「ハント、どうやら逃げなかった見てーだな
時代遅れなスケバン刑事^{デカ}」

「うるせえ二代目」

行き成り敵意剥き出しのお二人

これどうにかしてくれ

せめて敵意剥き出しにするのは冷凍庫に入ってからにしてくれよ…

ガチャン

「黒神めだか様、球磨川禊様

今回は選挙管理委員会の意向により、お二人を手錠で繋がせていただきます

お二人が乱入、暴走怖れがあるのでこのような措置を取らせていただきます

この手錠は風紀委員会の新型の手錠ですので、外れる事は先ずありません」

まあこれが当たり前の措置だろうな

これでお互いを警戒し合う事によって、お互いの乱入を防ぐ
まあ球磨川にその意思があるのかは知らないけどな

「さてそれでは志布志飛沫様

この十三枚のカードの中から一枚をお選びください」

「そうだな、やっぱり球磨川さんを真似てアタシも巳でいくぜ」

そして志布志は巳のカードを渡す

「流石志布志様、微塵も恐れずに巳のカードをお選びになるとは……今回の書記戦の形式は「冬眠と脱皮」に決定いたしましたこれは我々が用意した書記戦の十三の対戦形式の中で、最も残酷なルールで行われる選挙でございます」

そして巨大冷蔵庫前

「それではルールをご説明いたします
書記戦の勝利条件は単純明快でございます
書記戦では腕章を取り合っていたきましたが
今回は相手の身包みを全て剥いだ方の勝ちとなりました
でございます」

うん、やっぱり阿久根が入院してよかった

男子VS女子なんてやったらR-18行きだからな

志布志&蝶ヶ崎、GJ！

いやまあ女子同士でだったら良いって訳でも無いんだけど

「『…おいおい

いい加減にしなよ長者原くん

苦言を呈さずにはいられないよ

そんな芸者遊びみたいなふしだらなルールなんて、神聖なる学び舎で行っていいわけが無いだろう』」

さんざん学校を廃校にして、新生徒会のマニフェストの一つとして不純異性交遊の努力義務化を掲げたお前がそれを言うのか？
説明を纏めると…

「零下48度、南極さながらの極寒空間である巨大冷凍庫が舞台です
ギブアップはありません
どちらかがどちらかの身包みを全て剥くまで戦いは継続いたします
剥いだ相手の服を着るのは可能です
というよりそれがこの戦いの肝でございます」

って事らしい

「『めだかちゃん

もしもこの戦いで飛沫ちゃんが負けたら、僕はその時点で箱庭学園から手を引くよ

大丈夫、信じてるからね』」

志布志はその言葉を聞くとそのままの姿で冷凍庫の中へと入って行った

「分かったよ

1%でも可能性がある限り、アタシは絶対に諦めない！」

……それは生徒会側が言うべきセリフであって、俺達過負荷マイナスが言うセリフじゃねえぞ？

まあいいか

ブシャアア！

そしたら黒神くじらが血だらけになって倒れた

スカーデッド
致死武器

古傷を強制的に開く過負荷マイナス

怖えーよな

完治していようが問答無用で開くんだぜ？

「ケツ、全く

不意打ちみてーな当たり前のこと、人吉とか黒神とか真面目な奴相手にやってるよ

俺は名瀬天歌、箱庭学園一不真面目な生徒だぜ？」

こうして、生徒会戦争書記戦

名瀬天歌VS志布志飛沫がスタートした

生徒会戦争、書記戦 破（後書き）

ありがとうございました

生徒会戦争、書記戦 急（前書き）

連続投稿）

とうとう主人公の（捏造された）過去が明らかに！

生徒会戦争、書記戦 急

「なっ!？」

志布志はまだ意識があったことに驚いているようだ
まああれだけの傷を一度に開かれたら気絶しててもおかしくないけどな

「早速一枚剥がさしてもらったぞ
キャラに似合わず可愛いパンツはいてんじゃねーか！」

「っ!？」

ゴンッ!

まるで鈍器でたたいたような音がした
くじらが血で固めた包帯を当てたようだ

「ほどこいた覆面を血で凍らせて鈍器にした!まるでハンマーみてーに!！」

「ああ、わりーわりー間違えた
これ俺のだったわ」

「っ、てめえ！」

そして志布志が剃刀で攻撃する

しかし、服が切れたものの、くじらに傷が付く事は無かった
出たか：

ブラックオウガ
「黒鬼……」

「『知っているのかい？』」

「ああ、黒神先輩がサーティーンパーティー十三人の十三人の宗像先輩の協力を得て作った
代物だ

低温にも高温にも低湿にも度高にも湿度北極であろうと南極であ
ろうと砂漠であろうと高山であろうと、ありとあらゆる環境に耐え
うる全方位型実験服、白衣ならぬ黒衣
ブラックオウガ
それが黒鬼だ」

確かにこれは厄介だ
まあ俺だったら力任せにぶっ飛ばすけどな
生徒会側は驚いているようだ

「何で知ってるって顔だな
まあ知ってるもんはしょうがない、知ってるんだからな」

そしてくじらが志布志に注射を投げる

「出ったあー！ゲージ溜め必殺！
『静脈注射の乱れ打ち』……」

人吉、お前

庶務戦の頃の輝きは何処へ行った……

「おい球磨川

約束はちゃんと覚えているのだろうか？」

「『……………約束？』

そんなことを気にしている場合じゃないだろう！？きみ達は！』

きみ達はこんな血生臭い戦いを見て何とも思わないのかい！？

こんなのは選挙でも何でもないただの殺し合いだよ！

女の子同士が傷つけあうのを雁首揃えて眺めているだなんてどうかしている！！

もういい！僕達の負けで良いから！

早く彼女達をこんな馬鹿げた争いから解放してやってくれえーっ！！

…………と、泣いてみてもそろそろ誰も信じてくれなくなったと思うので

普通にコメントしてあげるね、めだかちゃん

志布志ちゃんマイナスは過負荷マイナスの中で勝ちを計算できる過負荷マイナスだからね』

まあ確かに志布志マイナスは過負荷マイナスの中では性格はまともな部類だと思うあくまで過負荷マイナスの中ではだが

「…………氷剣」

すると突然めだかが話しかけてきた

「実に不謹慎だとは思いますが、貴様のことを少し調べさせてもらった」

「はい？」

俺の事を調べた？

そんな事をしたって無駄だろう

俺は箱庭学園入学までこの世界にいなかったんだから

めだかは一つの資料の様なものを取り出した

「氷剣刀哉、15歳

1994年7月16日、栃木のとある町で生まれる
4歳の頃に、母親が病死」

おいしい！

何でそんな過去があんだよ

（ふおっふおっふお

ワシが勝手に考えさせてもらったぞい）

神イイイイイイイ！！

「その頃氷剣家は多くの借金を抱えており、父親の氷剣健治は黒神グループの社員として働いていた

氷剣健治は上司が理不尽なことを押しつけることに対して反発した

その結果、その上司は私の父に氷剣健治が不正をしているという

嘘を吹き込み、氷剣健治は解雇

そして氷剣健治は……借金に耐え切れなくなり自殺」

「なっ！？」

おい神！

お前何変な設定にしてんだ！

俺シリアスとか苦手なんだよ！

（フン、それを見越しての事じゃ
精々苦しめ）

このヤロオオオオ!!

「氷剣、貴様が生徒会に：

…いや私に敵対するのは、復讐なのか？

お前の父親を、自殺へと追いやった、私の父への
そして、その娘である私への…」

やばい、これは盛大な勘違いをされている

これはどうする！？

急いで訂正しないと

やばいやばいやばい、どうする！？どうするよ俺！？

脅すか？違うって脅すか！？（主人公テンパって思考がおかしくな
っております）

シュン

俺は瞬動でめだかに近付き、ナイフを首に突き付ける

「おい、勘違いするなよ

俺が敵対するのはあくまで面白いからであって、そんなシリアス
染みた理由なんかじゃねえ

俺の行動原理を履き違えんじゃねえよ」

「しかし、貴様は心のどこかで思っているのではないのか？
私を、私の父を殺してやりたいと」

「だから違うつってんだろ

人ってのは遅かれ早かれ何れ死ぬもんだ

俺の家族の場合はそれが速かった、ただそれだけだ」

よ、よし

これで少なくともこれで余計な勘違いは無くなっただろう

（寧ろ悪化しと思うのじゃが…

まあいいじやろ、その方が面白そうだし）

「ひひひひひひひひひひ！！」

この悲鳴…

くじらの心の古傷、幸せだった頃の記憶がよみがえったか
だがそれはブラフ

ブレーカーを落とすための演技に過ぎない

ブォン

冷凍庫の中が真っ暗になる

「くっ

これじゃあ中の様子が見えねえ」

「ただいま予備電源を起動させましたのですぐに灯りが付きます」

パッ

そして灯りが付くと、くじらの姿は無く、くじらが来ていた服のみ
が残っていた

「球磨川、頭を借りるぞ」

「『え？』」

めだかは球磨川の頭を掴み、そのまま球磨川の頭を……

ガッシャアアアン！

窓ガラスに叩きつけた！？

お陰で冷凍庫の冷気がこっちに來たじゃねえか
結構寒いので一方通行で冷気を反射する
アクセラレータ

「私は心配も激励もしない

何故ならあなたは、黒神くじらという姉は、逆境でこそ輝く人だから！！」

すると、くじらがの影から包帯だらけの格好で出てきた

「やっと出てきたか

これで止めを刺してやるよ」

そう言って志布志はくじらに手を伸ばす

しかし次の瞬間、くじらの手から伸びた氷が志布志の手を氷漬けにしていた

「氷点下の脅威から生き残るために制作したこの過負荷を、過負荷
マイナス
の恐怖から生き残るために成立したこの過負荷を、俺は「凍る火柱」
マイナス
と命名する」
マイナス
アイスファイア

生徒会戦争、書記戦 急（後書き）

ありがとうございました

生徒会戦争、書記戦 終（前書き）

何とか頑張ってます

生徒会戦争、書記戦 終

「『素晴らしいものは地獄からしか生まれない』

それがこの俺、名瀬天歌の主義主張だったんだけどよ

こりゃあちよつとばかし修正が必要かもしれないねえな

何せこおんなおぞましい過^モ負荷が今、地獄^{こじ}で生まれちゃったもん
なあああああ!?!」

とうとう発現したか

アイスファイア
凍る火柱

つーかこれよく考えたら初春飾利の定温保存^{サーマルハンド} に似てね?

あ? そう思ってたんの俺だけ?

マジで?

まあそんな事はどうでも良い

「ぐっ この逆境でいきなり過負荷マイナスが発現するとか…あり
えねえ!

そうだ! こんなトリックに決まってる!

その辺の冷凍機器を利用して、お得意の仕掛けを即興で作ったん
だ!」

「名瀬先輩が過^{マイ}負荷^{ナス}を発現させた…、いや作った?
自身を改造して? そんなことが可能なのか?」

「恐らくな

名瀬妖歌は改造^{イジ}のプロフェッショナルだ
自分の体を改造^{イジ}る位造作もないだろう」

「『ハァ、全く

追い詰められたら奇跡的に都合よく新たな能力に目覚めるとか、
そういうのは週刊少年ジャンプの中だけにしておいてほしいよね』」

「まあ、そう都合よく新たな能力に目覚めちゃうのがこの世の中だ
しかし、よく自分自身を改造しようなんて思ったよな
俺にとってはそっちの方が驚きだぜ？」

「はっ、人体改造の専門家であるこの俺に球磨川禊の^{オールフイクション}大嘘憑き、江
迎怒江の^{ラブラフレシア}荒廃した腐花、志布志飛沫の^{スカーデッド}致死武器と三つも^{サンプル}過負荷を見
せちまうなんてよお
俺に^{マイナス}過負荷を身につけてくれとお願いしてるようなもんじゃねー
か」

まあ確かにな

くじらは改造のプロフェッショナル
自分自身の改造は造作もないってか？
しかし、自分の体温を操る、か：

「『怯えてんじゃねーよ志布志！

聞けばそいつの凍る火柱はついさっき身につけたばかりの^{マイナス}過負荷
らしいじゃねーか！

つまり使い慣れてねーってことだ！

ビビるこたあねえんだよ！』」

球磨川の応援を受けて気力が少し戻ったのか、志布志が攻撃を再開
する

だが、くじらの体から血が出る事は無かった

「なっ！？」

何で傷口が開かねーんだ!？」

確かに驚くだろう

自分の能力が通じていないように見えるのだから
だが、通じていないって訳じゃない

「志布志！」

「ああ!？ 何だよ氷剣！」

「そいつの能力はあくまで自分の体温を操る事だ

お前の能力を無効かなんかしちやいねえ

そいつは開いた傷口を片っ端から凍らせて止血してんだよ」

そう言ったのはいいが：

ハッキリ言ってほぼ無効化されたに近い

志布志が開いた傷口が片っ端から止血されてちやあ意味がねえ
心の傷を開いても

「ハン

どんなに心の傷を扶ろうが、もう気かねーぜ

どんなにhotにさせようが、頭を冷やすことでどこまでもCO
OIになれる」

てことだ

どういう原理だよ

体温低くすれば冷静になれるとか

確かに暑いと思考能力低下するけどよ

だからって寒けりゃいいってもんでもねーだろ

「『飛沫ちゃん

いーや、もう負けちゃっても

ここは素直に負けを認めて、一十三組皆でこの学園を出て行こうよ
他に学園なんていくらでもあるんだからさ

だからせめてド派手に、めいっぱい華々しく負けようよ』」

そう、負けていいのならば

「Ok!

負けていいってんなら過^{アタシ}負荷の修羅場だ!」

ズバア!

俺以外全員の傷口が開いた

建物にも効果が及び、既に崩れそうになっている

俺? ^{イマジンブレイカー}幻想殺しで無効化してますが何か?

^{アクセラレータ}一方通行だと逆に志布志の古傷が開いちまうからな

「そうか! 十年ぶりのあのスキルですね!

志布志さんが自分を制御できるようになった今、もう見ることは
ないと思っていましたが…」

「喰らいな…」

^{バズーカー・デッド}アタシの「憎武器」!」

そして音が一層大きくなり、とうとう建物ごと崩れるかと思われた
が…

「足掻くなよ一年子ちゃん

飛沫が吹雪に敵うはずがねえだろう!」

次の瞬間、建物ごと凍らせてそれを阻止したくじらの姿があった
もう完全に詰んだな
これじゃあどうやっても勝てねえよ

「ご、ごめんなさい…
許して下さい…」

「はっ、誰が
とはいえやっぱりうら若き女子の服を剥ぐというのは…
…気乗りしないぜ」

そんな悪魔みてーな笑みを浮かべておいてよく言うぜ
どう考えてもこの状況楽しんでんだろ

「今から20秒後ろ向いていてやる
その内に早く脱げよ」

そしてくじらが後ろを向いた瞬間
志布志がつららを持ってくじらに襲いかかった

「ハッ、氷なら凍んねえだろ！」

志布志、それは確かに一理あるが、それはあまりにも…

「違うね
氷には炎だ」

…分かりやす過ぎるぞ

ゴオオオ！！

くじらが志布志の服ごと燃やした

「俺が不用心に背中を向けると思ったか？

手の甲の氷で作った鏡で様子を窺ってたんだよ」

うわぁ、流石黒神くじら

油断&容赦ねえ

「やれやれ、最後のチャンスを逃したな

お前がまともな人間になれる最後のチャンスをよ」

生徒会戦拳、書記戦

生徒会側の書記代理、名瀬妖歌の勝利にて、終戦

生徒会戦争、書記戦 終（後書き）

途中から主人公が空気になってると思われるかもです
次回はこちらと出番作るんで

そうそう、今日やっと中間試験が終わったんですよ

これでやっと試験勉強の日々から解放される（涙）

因みに最近メタルギアソリッド・ピースウォーカーにハマってます

生徒会戦拳、書記戦 後（前書き）

よろしくお願いいたします

生徒会戦争、書記戦 後

長者原が判決を下す

「生徒会戦争書記戦は、現生徒会書記、名瀬妖歌様の勝利でございます！」

「お姉さま…」

めだかがくじらに握手を求めるが…

「ふざけんなよ」

その言葉の意味は拒絶
かのように思われたが…

「こっちだろ？こーゆー時は普通はよ」

パン

否、ハイタッチで答えたのであった

一方球磨川は志布志を^{オールフィクション}大嘘憑きで元通りにしてた

「『…いい試合だったよ

負けはしたけれど、それ以上に得る物は大きかったね』」

「にしても生み出したばかりの過負荷を^{マイナス}あそこまで完璧に制御する
とはな

驚いたぜ」

するとそこにめだかが近付いてきた

「球磨川

貴様、約束は守るのだろうか？」

「『……………さあて、どうしよっかな？」

不安かい？めだちゃん

僕が約束を守るか破るかわからなくて

僕はぜんっぜん不安じゃないぜ？むしろ最高に楽しいよ

約束を守る、約束を破る

僕は今、どちらでも好きな方を選べるんだから

約束は破るためにあるとか言ってる連中^{ワルモノ}には考えられない自由度だ

…でも、今日の僕は約束を守ろう

約束通り、一十三組は箱庭学園から手を引くよ』」

「ハッ、つまんねえの

まあ良いさ、球磨川がそう決めたんなら俺はついていくぜ？」

そして俺と球磨川はドアへの方へと向かう

「……………よかった」

「……………よかった」

「ああ

まあ、よかった」

「よかった」

生徒会側の人間が口々に言う
しかし、一人が違った

「よかったの？」

やな奴追い出して、それでめでたし？」

古賀だった

と言うか古賀って地味にいい事言う事多いよな

「お前、箱庭学園を守ることになつて大切なことをわすれてない？」

確かにここであいつらを追い出せば私達は助かるけどただであいつら、反省も後悔もしてないよ？

転入した時と同じテンションで転校していくつもりだよ？

きつとあいつらはすぐに私達のことなんか忘れてこれから同じように生きていくよ？

だから結局いつまでも負の連鎖が続く続ける

ひよつとしたらまたいつかパワーアップして私達の前に現れるかもね」

古賀がめっちゃカッコいい

サードライン・パーティー
十三組の十三人だった頃とは比べ物にならない位カッコいい

「なによりここでお前が見放したら球磨川禊という呪われた魂は永遠に救われない

敵も味方も大切にしたいって言ってたじゃん

みんなを幸せにするって言ってたじゃん

マイナス
過負荷はみんなには入らないの？球磨川だけは例外なの？」

「球磨川を幸せにとか…そんなことできるわけねーだろ！
そんなこと世界中のだれにもできねーよ！」

それに人吉が反論する

「うん、もちろん私もできないと思う

かくゆう私だって、球磨川を追い出す方が正しいとやっぱり思っ
てんだから

だけど黒神はずっとそのできないことをやってきたし、これから
もしていくつもりなんだろう？

やな奴追い出して一件落着いて、そんなの生徒会長じゃなくても
できるじゃん

どうしようもない負の連鎖を断ち切るために生徒会長はいるんじ
ゃないか！

私を見せてほしいんだ

フラスコ計画を潰した時みたく、正し過ぎるお前を！」

やべえ…

古賀のカッコよさに全俺が泣いた

「待て球磨川、約束を守ることが許さん
生徒会戦拳を続けるぞ

この戦いを通じて私は今度こそ貴様を改心させ、今度こそ貴様を
幸せにしてやる！」

そしてめだかが本来の在り方で言った
球磨川を幸せにしてみせると

「『……………惜っしい』い

もうちょつとでめだかちゃんを一般生徒いっばんじんにすることができたのに

人を嫌い、敵を潰す一般生徒に』

「確かにな

もうチョイで生徒会長を他の奴らと変わらないただの人だって言えたのによ

でもまあ、俺にとっては好都合かもな

こんなに楽しい事をこんなにあっさり終わらせちゃ面白くねえ
アイスファイア
凍る火柱も、中々おもしれえ過負荷だからな
マイナス

そして俺は手に氷を作りだす

「「「「「!?!?」」」」」

「この過負荷も結構便利だな
マイナス

けどよ黒神先輩、あんたがさっき言ったな?

「三つも過負荷を見せちまうなんてよお
サンプル
マイナス

俺に過負荷を身につけてくれとお願いしてるようなもんじゃねーか」
って

その言葉、そっくりそのままあんたに返すぜ

俺にあんな堂々と凍る火柱を見せちまうなんてよ
アイスファイア

俺に凍る火柱を身につけてくれと言ってるようなもんじゃねーか」

そして俺は氷を蒸発させる

「てめえ、どうやって俺の過負荷を会得しやがった!」
マイナス
改造も何もなしでどうやって!」

どうやって、か

何て言おう…

オールバート

全知全能のことはなるべく言いたくないんだよな

何かばらしちまったら面白くなさそうだしよ

「そうだな…

アブノーマル

生徒会長の異常と似てる、とだけ言っておこうか？」

「めだかちゃんの完成と!?!」
ジ・エンド

「ああ

と言っても、俺の能力は完成の天敵であり、完成は俺の能力の天敵でもある」
ジ・エンド

「どういうことだ!」

「そう焦んなよ

いつか話してやるさ」

次は会計戦か、どうしよう…やる事が無い
まあ細かい事はまた今度ってことで

「それにしてもよ生徒会長

生徒会戦拳を続けるつつつても、もうこっちは負けちまったんだ
ぜ？」

「その事なら俺が負けで良いぜ」

くじらが自主敗北を宣言する

「しかし、勝敗を逆転させることなどできません」

「いや実はよお、一回体改造する時に服全部脱いじまってんだよだから俺の負けだ」

「なるほど、それは私のミスジャッジでございましたではこの勝負、新生徒会側、志布志飛沫様の勝利でございます」

やっぱりか

てか寧ろこうなってもらわないと困る訳だが

「ハハッ、よかったじゃねえか生徒会長？」

これで俺らを幸せにするっていう目標を達成する可能性がまたで
きた訳だからよ

それじゃあ球磨川、もうここに用はねえ
引き揚げようぜ」

そして俺らは帰った

生徒会戦拳、書記戦 後（後書き）

中間試験が終わったんで、書くペースもだいぶ良くなりました
次回は会計戦の予定です
でも分かんないかもです
予定は未定ですので

生徒会戦拳、会計戦 序（前書き）

かなり短いです

生徒会戦争、会計戦争

そして一週間後

場所は学園の植物園「木漏れ日」前

そこに球磨川はガ克兰ではなくTシャツ姿と言うかなりラフな姿で登場

そこからは原作通りの展開をし……いや、していた

そう、その説明をされるまでは……

「今回は、会計役一人、パートナー二人によって行われる決闘でございます」

「あ？」

パートナー二人？

何故に原作と違う？

「『じゃあと一人はどうしよっか？

向こうは瞳先生と人吉ちゃん、それと古賀ちゃんが出るみたいだね』」

古賀もう治ったのかよ！？

ここが原作との相違点か

江迎と球磨川はもう出ることが決まっているなら……

「球磨川、俺が出る

そろそろ出番がほしかった所だ、ちょうど良いぜ」

「「「「！」「」」」」

「（とうとう出てきたわね、氷剣刀哉

アイスファイア

彼の能力はいまだに未知数、しかも凍る火柱を私達も前でいとも

簡単に習得してる

アブノーマル

マイナス

彼の異常、もしくは過負荷は一体何なの？）」

さーて、程々に暴れますか

今回の目標はあくまで引き分けだ

だがそれとは別に俺の目的はもう一つある

江迎を爆発の被害から防ぐこと

何だかんだ言って、江迎には人吉と仲良くなってもらいたいからな

数分後、俺達は植物園内に移動した

「それでは、決闘を開始致します」

そして、生徒会選挙、会計戦が始まった

生徒会戦拳、会計戦 破（前書き）

よろしく願います

生徒会戦争、会計戦 破

試合が始まって、数分

俺はほとんど何もしていない

向こうがどうやろうと思ってんのかは知らないけど、俺はただ植物園内を適当に散策してるだけだ

まあもう暫くすれば向こうから襲撃なりなんなりしてくんだろ

向こうが騒がしくなってきたから今頃は江迎の荒廃した腐花ラフラフレッシュ（狂い咲きバージョン）で迎え撃ってんだろ

さーて、こっちはどうなるのかな

ッ！後ろか！

俺は身を屈めることで古賀の蹴りを避ける

「！ばれていた！？」

「いや気付いたのついさっき」

ドガッ

俺は古賀の背中を蹴り、吹っ飛ばす

「ガッ！」

予想通り古賀が来たか
さて、どうするか

「しかし良かったのか？」

向こうじゃ人吉親子が球磨川と江迎と戦ってんだし、一人でも多

「の方がいいんじゃないか？」

「球磨川と江迎の相手は人吉達がしてるからいいんだ
それにお前に聞きたい事がある」

俺に聞きたいこと？

なんだ？

ここら辺は原作と関係ないから全然分かんねえ

「お前、前に黒神を恨んでないなんて言ってたけど、嘘でしょ
黒神がお前の話をした時、凄い殺気でナイフを突き付けてた
そんなこととして恨んでないなんて言っても信じられない」

……やっぱり、ナイフを突き付けたのは不味かったか？

「本当は復讐したいんじゃないの？

自分の家族を、人生をめちゃくちゃにした黒神と、その父親に」

「……復讐、か

じゃあ聞くけどよ、お前は復讐をどう思う？

しても良い事だと思うか？それとも悪い事だと思うか？」

「…アタシは、黒神みたいな事言うつもりはないけど、やっぱりし
ちゃいけない事だと思う

復讐する事によって、した人に対してまた復讐する…

その繰り返し、負の連鎖が続いちゃうから…」

なるほど、古賀らしい考え方だな

まあ正論っちゃあ正論だ

めだかが復讐に走るとは思えないが、くじらや真黒はわからないよ

なあ

「そうか…

この話は終りだ

それじゃ、始めようか？」

そしてお互いに戦闘態勢に入った時

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴオ！

ったく、このタイミングでこうなるかよ

生徒会戦争、会計戦 破（後書き）

ありがとうございました

生徒会戦拳、会計戦 急（前書き）

よろしくお願いします

生徒会戦争、会計戦争

恐らく人吉（子）と江迎、人吉（母）と球磨川を分断したんだろう
こっちはこっちの相手をするか

「そんなじゃ、始めようぜ古賀先輩」

そして俺達は拳をぶつけ合った

数分後

「ガッ!？」

こちらは無傷、古賀はボロボロという状況になっていた
なんでそうなったかって？

分かんと思うが説明しておこう
オフエンスアーマー
要塞装甲で殆ど防ぐだろ、それを破っても一方通行で反射すつから
意味ねーだろ

ワンサイドゲーム
はいただの一方的虐殺ですな本当に（ry

と言うわけだ諸君、分かっていたただけだろうか

っ！か今古賀の後ろにあるデッカい茎の向こう側って球磨川と人吉

（母）じゃね？

あ、古賀また立ち上がった
すげーなおい

「お前：なんで私の攻撃が…」

「そんなに不思議か？自分の攻撃が通じねえのが

教えてやるよ古賀先輩

ついでに監視カメラで聞いているだろう画面越しのお前らにもな

俺の能力に窒素装甲オフエンスアーマーつてのがあんだよ

窒素を自分の体に纏わせる能力だ

だから生半可な攻撃じゃ俺には届かない

更に一方通行アクセラレータつて能力もあんだけどよ

この能力はもののベクトルを操る能力だ

つまりベクトルの向きを逆にすれば衝撃をそのまま相手に反射で

きんだよ

だからあんたがいくら攻撃しようが無駄だってことだ」

「そんな…

クッ！」

だが古賀は持ち前の驚異の回復力で立ち上がる
その時、

グオオオオオオ！

やせいの 木のお化けが とびだしてきた（ポケモン風）

それじゃああのイベントももうすぐか

行くしかねえよなあ

「古賀先輩、一時停戦だ

いやな予感がする」

「いやな予感？」

「ああ、あれだけ過負荷マイナスを使っただ

何のリスクもないわけが無い
最悪、江迎がどうなるか分かったもんじゃねえ
っーわけで、先に行くぜ」

「な、ちよつとまて…」

シュン

俺は空間移動で江迎の近くに移動すると…
テレポート

「オーライ！」

こうなったら二十秒なんてみみっちい事は言わず、十分は持たせてやるわよ！」

人吉（母）が自分の体より大きなチェンソーを持っていた
一つ、どっからそれを出した？二つ、何でそんなデカイのを持ててんだ？

明らかにおかしいだろ
まあ今更だけどさあ…
ま、そんなことはどうでもいいや

そしてその後

人吉と江迎は無事友達（？）になり、めでたしめでたしになったが…

「『善吉ちゃんの両手の腐敗と、江迎ちゃんの過負荷を無かった事にしました
ラフラフラレシア」

更にお互いの鍵穴もね

これで誰にも爆発は止められない
それでは皆さんご唱和ください！

It's all fiction!!」

その瞬間、江迎が起き上がり人吉と球磨川の爆弾を外す
そして自分の腹の下に入れようとするが

「後は任せろ」

俺は江迎から爆弾を奪い取り、ムーブポイント座標移動で球磨川達を退避させる
後は、凍る火柱で凍らせちまえば……
あれ？何で凍らん……

ドゴオオオオオオオオオオン！！

無情にも、爆弾は爆発した！！

生徒会戦拳、会計戦 急（後書き）

ありがとうございました

もうすぐ夏ですね

皆さんは何か夏の予定はお有りでしょうか

まあ私は家の中のパソコンの前で必死に今後の内容を考えながらグ
ータラしてることでぐらいいですかね（笑）

それでは、次回もお楽しみください

さよなら、さよなら、さよなら

……カメラ止まりました？

もう良い？もう良いですかスタッフさん

あ、良いですか

ありがとうございます！

お疲れ様でした！

生徒会戦拳、会計戦 終（前書き）

よろしくお願いします

生徒会戦争、会計戦 終

）??? side）

「急いで保健委員会に連絡を！
病院にも連絡を回せ！」

長者原が迅速に的確な指示を出し、爆発が起きた地点へと救護班を向かわせる

一方、めだか達は一体何が起きたのか理解できないでいた

「『い、一体何が起こったんだ！？
何が起こっているんだ！』」

「あ奴は自分を犠牲にして自分以外の参戦者を助けたのだ」

「どういう事なんだよ……！？」

「江迎一年生は荒廃した腐花で腕輪を外し、自分の下で爆風を防ごうとした
ラブラフレシア

だがそこで氷剣が江迎一年生から爆弾を奪い、何らかの方法で善吉達を爆風の及ばない距離まで移動させた、と言うことだ」

「けどよーめだかちゃん
アイスフアイア

アイツなら凍る火柱で爆弾ごと凍らせちまえばいいんじゃないかねえか
？」

「それは私にも分かりませんお姉さま
あくまで推測ですが、何らかの理由で使用出来なかったのではな

いかと」

実にその通り

氷剣は何らかの理由で能力が発動出来なかったのである
どんな理由かって？

それは後のお楽しみです

「（自分を犠牲にしてまで他人を助けるなんて……
彼は本当に過負荷マイナスなの？

どうか考えても良心が無ければ出来ない行動よ）」

全員の氷剣に対する評価が変わり始めていた……

（氷剣 side）

ん？どこだここ

……教室？

なんd……おい

この教室、安心院ラスボスなじみのいる教室ラストダンジョンじゃねーか
なんでこんなところに…

そうだ、俺は爆発を止められずに爆発を受けたんだ

今は…あ？

能力は普通に使える

すると俺の能力を一時的に封じたのは…一人しかいない

「俺をここに呼んだのはお前か、安心院なじみ
そして何故お前は顔を近づけてきている」

「ん？」

一つ目の質問の答えは確かに僕だよ

はあ？

俺はお前と一度も会ったこと無いんだぞ

まあ良いさ、どうせすぐに分かる

は？俺の記憶？

俺が不思議に思っていると俺の頭に安心院なじみの手が乗って……

痛いいたいイタイ痛い痛いイタイイタイ痛い痛いいたいいたいイタイ
イタイ痛いいたいいたい痛いイタイイタイいたい痛いいたいイタ
イイタイ痛いいたいイタイ痛い痛いイタイイタイ痛い痛いいたい
たいイタイイタイ痛いいたいいたい痛いイタイイタイいたい痛い
いたいいたいイタイイタイ痛いいたいいたい痛いイタイイタイいた
い痛いいたいイタイイタイ痛いいたいいたい痛いイタイイタイ
痛い痛いいたいいたいイタイイタイ痛いいたいいたい痛いイタイイ
タイいたい痛いいたいイタイイタイ!!!!!!

だ此れはナンダコレハ何だコレハナンだこれはなんだ此れはナンダ
此れは何だコレハナンダこれは何だこれはナンだ此れはナンダコレ
ハ何だコレハナンだこれはなんだ此れはナンダ此れは何だコレハナ
ンダこれは何だ此れはなんだこれは何だ此れはなんだこれは何だ此
れはなんだこれは！！！！！！！！

次から次へと俺の知らない記憶がなだれ込んでくる

俺はこんな記憶知らない！！

俺はこんな記おく……

違う……これは……俺の……この……世界……の……俺の……きお……く……
そこで俺の意識は途絶えた

「あれ？ 気絶しちゃった？

流石に脳が耐えきれなかったのかな、主に内容の濃さに

まあ気が付いたら全て理解してるよね……

だから、早く起きてね……刀哉」

生徒会戦争、会計戦 終（後書き）

ありがとうございました

もう夏休みですね

私は友人とカラオケ行ったり塾の講習会があったりといろいろ忙しい身ですが、更新頑張ります

いやー、行き成り急展開を迎えることとなりました

この作品には似合わないかな？なんて思ったりもしましたが、書く事に決めました

ダメだしはなるべく控えてくれることを祈ります

作者の心はデリケートなのです、ガラスのハートなのです、ダイヤは圧力には強くても瞬間的な衝撃には弱いのです！

……すいません、最後は関係ありませんでしたね

まあそんなこんなで今後もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8384m/>

最強の異常者

2011年7月17日01時45分発行